391-117
1200901401407

391
117

目次

家出……一
別れ話……二〇
結婚……四八
分まへ……七一
公園にて……一〇〇
分れ……一一六
新事件の發生……一二四
交叉點……一四四
無心……一六五
狹呵……一九〇
惱み……二一五

國立國會圖書館藏書
I種
W
1200901401407

暴露……二三一
唉子と美代子……二五六
牢獄……二七六
三人……二九九
歸途……三二八
爭鬪……三四四
舊の道……三七六
破裂……三八八
母と子……四〇三
再會……四二二
海岸……四三四
死……四五〇

妹思ひ

徳田秋聲

家出

(一)

二人が東京を立つて、此の山奥の溫泉へ來てから、二月ほどの日が、譯もなくたつてしまつた。

藤野は家を出て、上野の停車場で河北と落合ふ時分から、ひつたり男に寄縋るやうな氣持になつてゐたのであつたが、旅費などはいくらか自分にも用意があつ

たし、指環だとか時計だとか云ふやうなものも有るだけ持つて來てゐたから、それで以て男が生活の方針を立てるまでの凌ぎがつかうと思つてゐた。それに其の溫泉地は、男の鄕里の町から左程隔たつてもゐないので、謂はゞ彼の產れ故鄕へ落着くやうなものであつた。

『鄕里へ歸りさへすれば、何うにでもなるせた。

『僕の頒け前としての田地や何かもまだ何町歩かあるし、山だつて賣れば直ぐ金になる。』彼はさうも言つてゐた。

東京にゐる間、河北が國から金を取つては費つてゐたことは、藤野もほゞ承知してゐた。それに腦が惡いとかで、學校の方も此の一年ばかりは出たり出なかつたりでいつ卒業すると云ふ當もないらしいが、彼は必ずしも學校は出なくとも、十分世の中へ出る自信があるやうに言つてゐた。藤野はそれを悉く信じてゐる譯ではなかつたが、深く疑ひもしなかつた。

で、この溫泉場へ落着いてから、一週間目に、河北につれられて、彼の所謂鄕里の家なるものをも見た。家は農家で、村では相應に古い家柄だとみえて、黑光のする大黑柱や天井の梁などは、可也しつかりしたものであつた。

三月の二十日頃のことで、この國では梅の莟が漸と膨らんで來たくらゐであつた。遠い國境の山は白い雪を冠つて、曇りがちな空に陰鬱な色をして、そゝり立つてゐた。大きな圍爐裏には粗朶が燻べられて、その周りに彼の弟妹たちが集つてゐた。弟妹といつても、みんな腹違ひで、河北には繼母にあたる彼等の母親は三十七八の年輩であつた。父親は割合に年を取つてゐたが、持病があるとか云つて、ぶら〳〵してゐた。繼母が一人でまめやかに働くといふ風であつた。藤野は河北の身の上が、自分に似てゐることは、前から知つてゐたが、それは單に繼しいなかと云ふだけのことで、心持は大分違つてゐた。河北は自分とちがつて繼母

を憎んでゐた。弟妹にも愛情をもたなかつた。父親にも反感があつた。自分獨り除けものにされてゐるやうな僻みも有つてゐた。お互に生みの母の愛情といふものを知らない。これが藤野の河北に同情した重な原因であつたが、河北が何うしてそんなに父母を呪はねばならぬか。その心持は藤野にはちよつと解りかねた。河北は藤野を自分の家へつれて行くとき、出來るだけ派手な扮裝をして行くやうに望んだ。

『でも餘り目に立つては惡いわ。』藤野は云つたが、それでも好い加減着飾つて行つた。

そして藤野はまるで珍客の待遇を受けて、奥座敷に据ゑられた。

藤野は少し長く逗留して、お互ひに打釋けたいと思つたが。河北は何故かそれを拒んだ。

(二)

藤野は餘り美しい方ではなかつたけれど、お化粧や着附が好いので、村ではひどく人の目に立つた。父や母も最初はそれが自慢で歡迎した。河北の信用も其のために悉皆快復されたやうにも見えたが、其も長くは續かなかつた。

或晩河北は舊い友達と、町の料理屋で酒を飲んで歸つて來ると、藤野は、嬌端で母親や弟妹たちと話をしてゐた。そして其の序に藤野は河北の現在について、母から色々のことを訊かれた。

『彌市はもう大學校を出たやうに申してをりますだが、何だか私らには信用もできませんよ。』母はさう言つて、是迄幾度も河北に瞞されたことなどを話して聞した。そして其話によると、河北は這度藤野と結婚したについて、此の村に近い町で一戸を構へ、何か大仕掛の株式事業を企てるとかで、それには相當の金もいるので、その相談を父親に持込んだと云ふのであつた。しかし其事業はどんな事業であるか知らないけれど、家も長いあひだ多額の學資を出して來たので、身上

も餘程崩れて來て、田地も抵當に入つてゐるところもあるし、迚もそんな要求には應じられまいと云ふのであつた。

勿論さうと分明言はなかつたけれど、母の其話は眞實らしく思はれた。家の樣子などから想像してみても、河北の不斷の話とは大分違つてゐた。それに又彼は藤野のことを、大變金のある家の令孃のやうに吹聽してゐることも、母の口吻で判つた。

『あんたの家は、えらい財産家だと云ふことを、彌市がこの間お父さんに話してをりましたつけが……』母はさう言つて、樣子を探らうとした。

藤野は餘り口數を利かなかつた。もと〳〵河北の財産を當にしたわけでもないし彼を信用し切つてゐるのでもなかつた。些としたはづみで、彼に將來を委せることにはなつたが、その將來には多分の望みを繋けてもゐなかつたのであつた。

河北は母と藤野と親しむのを、餘り悅ばなかつた。そして奥座敷へ來てからも厭な顏をしてゐた。

『何か母と話しをしてゐたやうだつたね。』彼は酒くさい息を吐きながら、床前に横たはつてゐた。

『え。』藤野は茶をいれてゐて、答へた。

『何を話してゐた。』

『何てこともないんですけれど……何だかお母さんもお氣毒のやうな方ね。』

『何か己のことで、零してゞもゐたのか。』

『いゝえ。』藤野は打消して、『さうぢやないんですけれど、田舍も餘り好いことはないわね。』

『ぢやお前は田舍が厭になつたといふのかね。』

『然う云ふ譯ぢやないけれど、人間はどこへ行つても、苦勞が絕えないんだわね。』

『今更そんなことを言つたつて、初まらないぢやないか。で、この家が鬱陶しい

と思ふなら、明朝にでも溫泉場へ歸らう。』

『それあ其の方がいゝけれど、お金は大丈夫？』

『お金？　金のことなんか心配しなくたつていゝ。お前はたゞ暢氣にしてゐればいゝんだ。』

それで藤野たちは、三四日ゐたきりで、双方餘り繿褸の出ないうちに、溫泉へ歸つて行つたのであつたが、河北だけは時々村へ行つたり、町へ出たりして、東京を立つときから心がまへてゐた水電事業のことで、奔走してゐた。

（三）

日が經つにつれて、近い山の谷々に殘つてゐた雪も解けて、溫泉場には梅が咲いた。すると其の梅も程なく雨に黃ろく汚れて、淺い綠の葉が出て來た。山の峽には常盤木の中に仄白い櫻の花が目に立つて來た。家出をしてから、もう大分日數もたつて、藤野は何だか賴りない日蔭者のやうな氣持で日を送つてゐた。

家ではもう大騷ぎをしてゐるだらうと想像された。妹の美代子がどんなにか悲しんでゐることかとも思ひ遣られた。勿論出るときには、置手紙をして來たので自分の身の上は安全だから心配してくれるなとは言つておいたが、姉思ひの美代子のことだから、獨り殘されたことをどんなに辛く思つてゐるか知れない。さう思ふと、藤野は立つてもゐても居られないやうな遣瀨ない氣持になるのであつたが、妹の幸福のためには、然うするより外なかつた。

河北は一日藤野の傍にゐると、二日は町へ出ると云ふ風であつた。彼は自分の爲てゐることについては何事も藤野に話さなかつたが、水電の創立について、熱心に奔走してゐることは事實であつた。無論それには有力な一二の主動者もあるらしいので、資金が集りさへすれば成立つ仕事なのだが、土地の氣風が因循なので捗々しく行きさうにもなかつた。藤野が不安に思つて、其の事を訊ねると、彼は今にも大會社の創立委員として、一躍して縣下の有力者となるやうな口吻を洩し

てゐた。

『この仕事が、今少し目鼻がついて來たら、それを土産に一度東京へ歸らう。そしてお母さんの承諾も得たうへで、華々しく結婚式を擧げやう。それも然う遠いことぢやないよ。』河北は藤野に話した。

『それは何時頃のことなの。』

『まあ遲くも五月……六月には歸れると思つて可い。』

『それまで私達はこゝに隱れてゐなければならないのね。』藤野は待遠しさうに言つた。

『それは爲方がないぢやないか。藤野さんにしても、二度と再び東京の家の閾は跨がない積りで出て來たのだから。』

『それは出る時は然うだつたんですけれど、母や妹が心配してゐるだらうと思ふと、私氣が氣でないわ。』

『けど夫も覺悟の前ぢやないか。それとも藤野さんは早瀨にまだ未練があるのかね。』

早瀨と云ふ名を聞くと、藤野ははつとした。忘れやう〳〵としてゐる彼の名を彼女はこゝへ來てから、一度も口にしたことはなかつた。聞かされたこともなかつた。藤野はぢろりと河北の顏を見たきり默つて俯向いてしまつた。

春めいた或暖かい日の午後のことで、二人は此の溫泉場を流れてゐる水に沿つて、山際の道を散步してゐた。碧い急流が、川岸の杉木立の隙から見えたり隱れたりしゐた。岩組の危い碧潭のうへに、橋が架つてゐたりした。藤野はそんな景色も、もう眼に映らなかつた。長いあひだ相愛の關係にあつた早瀨と、永久に別れなければならない運命になつたことに就ては、人にも話せない苦しみや惱みがあつた。此惱みは、恐らく彼女の生涯を通して頭腦に附絡ふであらうと考へられた。それに心にもない河北と一緒に東京を離れて、こんな處へ身を潛めやうとは

思ひもかけない事であつた。

『だが、藤野さんは僕とこゝへ來たことを、そろ〳〵後悔してゐやしないかね。』

河北は懲りずまに又問をかけた。

『私！　いゝえ。』藤野は應へたが、何だか河北にすまないやうな氣がして、心苦しかつた。河北に愛を打明けることになつた動機を考へると、それは眞の其の場の氣紛れで——それも單に彼の愛を受入れて、彼を愛しやうと思つたに過ぎないのだと思はれた。そして然うしなければならなかつた自分の立場を考へると、美代子の早瀨に對する深い愛を感づいたことが、原因であつた。

（四）

藤野が義理の妹の美代子と、自分の未來の良人と信じてゐた早瀨と相愛の關係にあることを知つたのは、つい此程のことであつた。

その戀愛關係が、何時から始まつてゐたかは、明かに知ることはできなかつた

が、體の弱い藤野が、此の冬二月ほど海岸へ行つてゐた。其の留守の間に進行したことは、藤野にも判つてゐた。不斷ならば、藤野の健康を氣にして、一度ぐらゐは旅行先へやつて來べき筈の早瀨が、毎時の熱情や親切はなくて、たゞ一と通りの病氣見舞であつたことが、敏感な藤野にひどく不安を感せしめた。美代子が一度海岸へ訪ねて來たときにも、然うした素振がちよい〳〵目についた。姉とちがつて、決活な明い氣分の女で、心の祕密を顏に出すやうなことは滅多になかつたが、其の晴やかな表情のうちに、何處と言はれず深い愁ひと惱みを裏んでゐた。そして心にもなくわざと早瀨を非したりなぞした。

『私あゝいふ人嫌ひ！』などゝ美代子は暗い目容をして言つたりした。

輕い肋膜だといはれてゐた藤野は、二月の半ばに舊の健かな體になつて、海岸から歸つて來たが、早瀨の態度の變つてゐることが、直に感づかれた。彼は可成

藤野と顔を合さないやうにしてゐたが、偶に逢つても、話が冴えなかつた。そして藤野が病氣になつてからも、あれ程待遠しく思つてゐた結婚のことは忘らたやうに口にもしなかつた。

『僕は貴女の健康が何より心配です。貴女は弱い稟質ですから、結婚のことなどは、當分考へない方が可いですよ。もつとずつと先へ延したつて、少しも差問のないことですからね。』早瀬はそんな事を言つた。

藤野はそれにも一應の理由はあると思つたので、默つて聽いてゐた。すると早瀬の態度が段々彼女を裏切つて行つた。結婚を忌避するばかりでなく、これ迄の相愛的關係から自由になつた方が、双方の幸福だなぞと言出すやうになつた。

藤野が早瀬を斷念するまでには可也な苦しみと試錬を經て來たのであつた。色色の場合で、彼女は美代子と早瀬の關係を感づかずにはゐられなかつた。別にこれと云つて、目に立つ劇的な光景や事實を目擊したわけではなかつたが、二人の

間はもう取返しのつかないことになつてゐるやうにも感せられた。一歩進めば、二人はどんなことになるか知れないと思はれた。

藤野はそのことを、何にも知らない母に打明けて、自分の態度を決めやうと、幾度考へたか知れなかつた。しかし其れを母の耳へ入れゝば、義理堅い母が、二人のなかを割いて、自分と早瀬の結婚を急ぐに違ひないと思つた。悲劇が三人の生涯を滅茶々々にしないではあらう。そして其の悲劇の發生を防ぐのも、成立たせるのも、一に自分の心一つに繋つてゐることを思ふと、じつとしては居られないやうな氣がした。

早瀬も河北も、さう古くから知つた間ではなかつた。父が同郷の友人であつた所から、早瀬は亡つた父の補助で學校を出た男だし、河北は早瀬の友人として、つひ一年ほど前から、女ばかりの藤野の家庭へ出入することになつたに過ぎなかつた。父が亡つた前後、早瀬は暫く藤野たちの家庭に身を寄せてゐた。河北がこ

の家庭と親しんだのも、其頃のことであとれない、無邪氣な少女であつた。藤野そして其には、亡つた父の意志も加はつて、母も傍から其成行を悦びの眼を以て眺めてゐたのであつた。

早瀬が主動か、美代子が主動か、それは藤野にも分明しなかつたが、左に右彼女は今までの道を辿つてはゐられなくなつたことに氣がついた。

（五）

藤野の胸の奥に裏まれた、其等の祕密については、河北は素より深くも知らなかつた。彼は以前から藤野に對して抱いてゐた自分の愛が、思ひがけなくも、彼女によつて受容れられた嬉しさの餘り、藤野の心持などには深く立入つて詮索する餘裕もなかつた。そして藤野のあわたゞしい希望で、彼は彼女をつれて東京を立つたのであつた。其前後の慌忙しい藤野の氣持から考へて、彼女の愛が遽かに自分に響いて來たと同時に、それが如何なに熱烈だなものかといふことも想像された。それほど藤野は決心した態度を彼に示したのであつた。藤野から言へば、あの場合相手を擇ぶ遑もなかつたほど、事情が切迫してゐたのであつたが、誓つて河北を愛する心にならうとは決心してゐた。

二人は今浴客の足を憩はせるために設けてある、河岸のベンチに腰かけて、岩に碎けて泡立つ水の流を眺めてゐた。河北から考へれば、今時分は早瀬との結婚の支度に忙しいはずの藤野と一緒に、こんな所を歩いてゐることが、まるで夢のやうな事實であつた。

『だが運命——と云ふよりか、女の心ほど不思議なローマンスはないと思ふね。』河北は話しかけた。『早瀬の者だとばかり信じてゐた人と僕は現在恁して此處にゐるんだからね。』

『それは私にだつて解らないわ。』藤野は淋しい微笑を浮べた。

『己たち自身にさへ解らないくらゐだから、早瀬は勿論、お母さんも美代子さんも、どんなに驚いてゐるか知れやしない。あの人達は、己を呪つてゐるに違ひないんだ。』

『お母さん初め、私を大した淫奔ものと思つて、怒つてゐるに違ひないわ。』

『そして今頃は、捜索の手係もなくて絶望してゐるだらう。』

『それを考へると、私眞實に濟まないことをしたと思ふわ。』

『けど其も暫くだよ。我々の仕事が緒につきさへすれば、更めてお母さんに逢つて、お詫もした上二人の結婚を許してもらへる時が來るんだから……今となつてみると最初から穩和な手段で話を進めた方が可かつたかも知れないよ。』

『え、でも、私のあの時の心持では、そんな生溫いことはしてゐられなかつたんですもの。』

『して早瀬が急に厭になつたと云ふ原因が、今に己にも解りかねる。あれ程愛してゐた早瀬を裏切る樣になつた、藤野さんの動機がね。』

『だつて、其は爲方がないわ。私の氣分が自然にさうなつて來たんだから。一つは長いあひだ交際つてゐて、餘りあの人のことが解り過ぎてゐたからかも知れないわ。今迄美しいと思つて大事にしてゐた花が、急に厭になつて拂り取つて了ひたいやうな氣のすることが、私子供の時よく有つたわ。』

『ぢや、後悔もしてゐないと言ふのだね。』

『それは多少惡いことをしたと云ふ氣もしてゐるわ。だけれど、それも當座だけだわ。それに私は、あの人の樣子が、近頃少し高慢になつたやうにも思ふの。さう見ると、私は何だかふッと厭になつたの。』

『しかし早瀬が今後どんな態度に出るかそれが見ものだと思ふ。戀人を浚はれた男が、指を咬へて引込んでゐる譯はないからね。』 河北は興奮した調子で言つた。

『あの人のことだから、當つけにわざと妹と結婚でもするかも知れませんわ。』

『そんな形勢があつたのかね。』

『いゝえ。』藤野はあわてゝ打消して、『だけれど然うなれば大變好いと思ふの。私心からそれを祈つてゐるわ。』

『何だか蟲のいゝ話だね。』河北は苦笑した。

別れ話

(一)

藤野が母と美代子に宛てた書置をおいて家出をした晩、ちやうど美代子は早瀬を彼の宿に訪問してゐた。母は客來で奥の室で用談に時を移してゐた。父の歿後株や家作の揚りなどで生活してゐる此の一家は、牛込の奥の方でひつそり暮してゐた。

中學校へ出てゐる弟の弘一は二階の書齋で、勉強してゐた。

美代子は其頃、姉の藤野の樣子を何となく無氣味に感じてゐた。美代子には其の頃緣談の口が一つ二つかゝつてゐたが、中でも其一つは或財産家から持込まれた話でいくらか母の心が動いてゐた。去年から持越しであつたが、美代子は餘り望ましい緣談でもなかつたところから、彼女はそれを不斷兄と思つてゐる早瀬に相談した。相談といふよりも、寧ろ不滿を訴へたと云ふ方が適當であつた。

その財産家の若い繼嗣が、餘り評判の好い男でなかつたため、早瀬も美代子の其の不滿には心から同情したのであつた。そしてそんなことが不思議にもお互の心と心の觸れ合ふ動機となつて、若草が軟かい芽を出すやうに、二人の胸に優しい愛が燃えはじめたのであつた。

早瀬は心から美代子を可憐に思つた。長いあひだそれを眞實の戀と信じてゐた藤野のそれに比べると、この新しい愛が、どんなに彼の若い感情を唆つたか知れなかつた。藤野の愛を裏切ることは、彼に取つて忍びないことであつたが美代

子と一度そんな氣持を語り合ふやうになつてからは、色褪のしたやうな古い愛を飽き足りなく感じないではゐられなかつた。そして其の戀が、迚も望みがなさうなところから、二人の心は一層傷み易くなつてゐた。

この惱しげな二人の戀は、主に藤野の旅行中、秘密な手紙の往復などによつて辛うじて慰めを得てゐたのであつたが、偶には逢ふ機會もあつた。二人は遣瀬のない思ひで、甘い語を取交したのであつた。

けれど其の關係も、長くは續けてゐられなかつた。藤野の健康が恢復すれば、早瀬は彼女の良夫となるべく定められてあつた。そして美代子は、何處かへ片着かなければならない運命であつた。

美代子は自分の秘密を、姉に感づかれたのではないかと、それを深く怕れた。また事實姉の口から、そんな事を、それとなく洩らしたこともあつた。で、美代子はその話をして、綺麗に早瀬と切れてしまふつもりで、其日の夕方、事に託つけて彼の宿を訪ねたのであつた。

早瀬は本郷の方で下宿の三階にゐた。もう相當の收入もあつたし、藤野の良人と決つてゐるので母から時々物資の供給も受けてゐた。

美代子が尋ねて行つて時、彼は勤め先から歸つて湯に入つたばかりであつた。そして二室つゞきの見晴しの好い部屋で、彼は籐椅子に凭れて疲れた體を休めてゐた。

二月のことで、外は寒い風が吹いてゐた。美代子は姉に比べると、體が小く、顏もきり〳〵と締つた方で、目や何かの表情も活き〳〵してゐた。

二人は寒さの挨拶をしたきり、暫く默つてゐたが、其中早瀬は女中に湯を呑吩けて茶なぞ入れた。

『わたし今日はお友達の處へ行くといつて、窃と出て來たの。何だか姉さまが感づいてゐるやうな樣子だから、氣味がわるくて爲樣がないの。』美代子は肉づき

の好い白い手を、火鉢にかざしながら、深い目色をしてゐた。

『この間から、美代子さんはそれを氣にしてゐるやうだが、實際そんな形迹があるんですか。』

『それあ姉さまのことだから、口へ出しては分明言はないけれど、時々妙なことを言ふの。』

（二）

早瀬は其の事について、美代子から二度も手紙を受取つてゐた。早瀬が藤野に向つていくらか微見せたとほり、私は病身だから結婚は見合せたいと言つて、美代子の氣も引いて見たことや、今日まで自分を眞實の子や姉のやうに愛してくれた母や美代子のためなら、自分はどんなことでもする積りだと言つたことなどから考へると、感じの速い姉が、疾うに自分たちの關係を氣づいてゐるに違ひないと言ふのであつた。

『美代子さんの手紙のとほりだとすると、いくらか疑つてゐるかも知れないね。それでそんな事を言つて、探りを入れて見たのかも知れないね。』早瀬は美代子のくり〳〵した目を凝視めながら言つた。

『確かにさうなの。』美代子は嫣然笑つて、顔を紅くした。

『それで美代子さんは、何とか言つたの。』

『私どきりとして、何とも言へなかつたわ。』美代子は惱しげな胸を抑へて、『それに愁つか下手な辯解でもして、襤褸が出ても困ると思つたから、默つてゐたの。』

『それが可いよ。沈默は一番悧巧な遣方だからね。』

『實際氣が咎めて、顔が上らなかつたんですもの。だから私この頃可成姉さんに顔を合さないことにしてゐるんですけれど、其れでも又惡いと思つて、不斷のとほりの調子で、話をしやうとするんですけれど、それが何うしても挫折がちなの私ほんとうに苦しくて爲樣がないわ。』美代子はさう言つて、俛いてほろりとし

た。

『それで、如何だらう。姉さんはその疑ひをもつてゐる以上、僕との婚約は破棄してしまふつもりだらうか。』早瀬は微聲で訊いた。

『それは如何だか解らないわ。』美代子は顔をあげて、『だけれど内氣な姉さまのことですから、そんな思ひ斷つたこともできないかも知れないわ。』

『すると、我々さへ默つてゐれば、何のこともなく濟むかも知れないね。』

『夫も貴方がほんとうに姉さまを愛する氣になつて下されば……』

『それならば、僕が僕の良心を欺く丈で、總てが圓く行くわけだけれど、長いあひだのことだからね。』早瀬は嘆息するやうに言つて、『それも、姉さんの其の疑ひが悉皆釋けなくちや駄目だからね。』

『あなたの愛情一つで、それを釋くことができると思ふわ。』

『僕にはそんな自信はないけれど美代子さんが立場に困るといふなら爲方がない不徹底ながら然うするより外ない。それも破綻なしに行くか如何か……』早瀬は惱ましげに首を傾げてゐた。

『わたし姉さまが可哀さうでならないの。この上あの人を裏切るやうなことは、私には迚もできないわ。』

『ぢやお互ひに欺き合つて、そつとしておいた方が安全だと言ふのだね。』

『それに、これを告白することになると、私はとても生きてはゐられないやうな氣がするわ。こんな苦しい思ひをするくらゐなら。一ト思ひに懺悔をした方がいと、私さうも思ひますの。そして人情や何か棄てゝしまつて強い女になつてみたいやうな氣もするの。だけれど、それは迚も出來ないことだわ。今の私には望めないことだと諦めてゐますわ。』美代子は目を潤ませながら言つた。

『それぢや我々は、もう悉皆諦めるより外ないんだね。』

『え。』

『美代子さんが其の氣なら、僕だつて其の氣になれないことはない。』

『え、どうぞ……』

（三）

氣がついてみると、ちやうど時刻なので、御膳を運ぶ女中の跫音が廊下の其處此處に聞えて、早瀬の部屋へも夕飯が運ばれた。

『それは然うと、美代子さんは御飯は？』と、早瀬は訊ねた。

『私いゝの。お腹が一杯なの。』美代子はまた胸を抑へるやうにして、

『貴方召食るといゝわ。私もう直きお暇にしてよ。』

『僕も豈おそく洋食を喰つたから肚はまだ好いんだ』と、女中を振り顧つて、『お い、飯はいゝから下げてくれ。』

『然うですか。』と、女中は其まゝお膳を引いて行つた。

『美代子さん、少し外へ出てみないか。』早瀬は窮窟な部屋では、話もできないといふ風で、美代子を誘つた。

『さうね。』

『僕は此節は出癖がついて困る。夕方の散歩にはまだなか〳〵寒いけれど。』

『さうね。濛靄のかゝつた晩なんか好いわ。だけど、私さうしても居られないわ。』

『では美代子さんを送り旁江戸川邊までぶらつくとしやう。』

早瀬はさう言つて帶を締直し、足袋をはいて、袂へ手帛や鰐口を押込みながら、二重廻しを着た。

『ぢや、今お願ひしたこと急度ね、忘れちや厭よ。』美代子も甘えるやうに言つて、コオトを着たり、肩掛をつけたりした。

『それあ僕からお願ひすることだ。眞實にしつかり賴むよ。』

『私は大丈夫よ。』

二人はいくらか頭腦が輕くなつたやうな氣持で、打揃つて外へ出たが、もう恁うして一緒に歩くのも、今度限だと思ふと、何だか厭な氣がした。是迄とても二人は決して自由ではなかつた。始終罪人のやうな暗い心持で、遣る瀬のない秘密の歡樂を偸み〳〵して來た。そして其の期間も短く、お互に抑制心もあつたので、逢ふたびに、お互の不安と悔恨とを語りあひながら、これが是限になると云ふ時もなくて過ぎた。

『お互ひに仕切を拵へておきませうね。』美代子は或時はさも屑よげに、そんな事を言つて誓つた。『そして姉さまが歸つて來ても、氣取られないやうに、今から直り悔改めませうね。』

早瀬も夫には同意であつたが、その印象は美代子の胸に生涯痍痕となつて殘るであらうと思ふと、そんな過誤に引入れた自分を憎まずにはゐられなかつた。

『私ほんとうに姉さまに合す顏がない。』或時は美代子はさう言つて切なが

た。

で、美代子はこれきり二人きりではお目にかゝらないなぞと、手紙で立派に言つてよこしながら、やつぱり後から〳〵物足りない思ひが湧いて來た。

時とすると早瀬は彼女に結婚を勸めて、優しく慰めて還した。美代子はそれをよく理解した。そして素直に受容れた。然し素直であればあるで、それが又彼の氣にかゝつた。感情の强い美代子のことだから、一旦燃えだしたものが、さう急に直り消えてしまはうとは思へなかつた。それが如何な風に燃えあがるか知れないやうな氣がした。

今夜なども、表面別れ話をもつて來たのは彼女の方からだが、それを默つて受容れていゝか惡いかは疑問であつた。

靜かな晩で、外は蒼い濛靄が深く立罩めてゐた。通の方へ出ると、二人は店屋店屋の明を憚るやうに少し離れて、默つて歩いた。

交叉點までくると、美代子はちよつと立停つた。
『私こゝから獨りで歸りますわ。』

（四）

『さう、ぢや然うしますか。』早瀬は逆らはないやうに、彼女の自由に委さうと思つたが、今夜の美代子の興奮の爲方が、何となく彼に不安の念を抱かしめた。で、放すには放したが、また急に傍へ寄つて行つた。
『大丈夫？』
『え、大丈夫よ。私あれだけのことをお話すれば、澤山なのよ。』
『それなら可いけれど、僕も何だか氣にかゝるからね。』早瀬は忸怩してゐた。
『貴方さへ姉さまを愛して下されば、私なんか如何なつても可いと思ふわ。』
『では結婚する積ですか。』早瀬は不安さうに訊いたが、美代子は返辭をしなかつた。自分も不賛成だつたし、彼女も厭がつてゐる大槻家との結婚のことを憶出すのも傷ましいやうな氣がした。
『では、恁うしやう、どこか其邊で珈琲でも飲んで別れるとしやう。』
『え、それでも可いけれど……さう決めてしまつたんだから、今夜は早く歸つた方がいゝわ。』
『さう、ぢや然うしやう。だが心配はないね。』早瀬は駄目を推した。
『これから歸つて、また姉さまに顏を見られるのが、私ほんとうに辛いの。それを脫れるために、私寧そ思ひ切つて、結婚してしまふかとも思つてゐます。』
『さう。』早瀬は傷ましい表情をしたが、『だが、そんなに事情が切迫してゐるのかね。』
『周圍の事情は不斷のとほりなの。だけれど、私の心持から言へば、それは隨分切迫してゐると思ふわ。』
『だが、輕率なことをしちや不可い。一時の苦みを紛らすために、終生取返しの

つかないやうなことがあつては、大變だから。』

『けれども、今は其を言つてはゐられないの。私姉さまの目から脫れることさへできれば、自分の一生などは如何なつても介意はないと思ふわ。』

『それも然うだが、其では少し自棄のやうだね。もつと冷靜に考へる必要も餘裕もあるのだからね。それに、美代子さんの生涯については、僕にだつて責任がある。僕は看々美代子さんが不幸な運命に陷つてゆくのを、默つて看てゐる譯にはいかない。』早瀨は微聲ながら熱心に言つた。

美代子は涙含しい目をおとして默つてしまつた。

『ね、さうぢやないか。』

『え……』と、美代子は目に涙を入染ませて、『それは有難いには有難いんですけれど、貴方には双方は救ふと云ふことは出來ないわ。姉さまか私か、孰か一人は犧牲にならなければ……』

『それで問題が生ずるんぢやないか。』

『それを解決するには、私が犧牲になるより外ないんですもの。』

『同じ犧牲になつてもらふにしても、出來るだけ美代子さんの利になるやうな方法を取るのが、僕としての義務なんだからね。』

『え。』美代子は頷いた。

『それに、僕が孰により重い責任をもつてゐるかと云へば、夫は藤野さんよりも美代子さんなんだ。』

美代子は悲しげな目をした。

『藤野さんの方は、たゞ婚約があると云ふだけで……それは成程重いには違ひないけれど、でもあの人の體はまだ如何にでも始末のつけやうもある。』

『駄目よ。』美代子は下唇を咬んで、惱ましげな表情をした。

早瀨はまた思ひ出したやうに、四邊に入つて話をするやうな場所がないかと見

廻した。

（五）

すると早瀬は其處から二町ほど行つた處に、割合に物綺麗で、極暢氣なカフエが一軒あることを思出して、そこへ行つてみることにした。で、自分はウキスキイに料理を二三品、美代子にも一皿二皿取ることにして、ひそ〳〵今の話を續けたが、衝立の蔭に學生が二人ゐたし、女給仕が其處らを往復するので、美代子は落着いてもゐられなかつた。

『僕の今言つたことは、解つてゐるね。』早瀬はフオークを動かしながら、可愛氣のある目で美代子を眺めた。

『え。』と、美代子も機械的に手を働かせてゐたが、『でも孰が可愛相かといへば姉さまの方だと思ふわ。私たちは罪を犯してゐるんですもの。』

『それも美代子さんの自責の念が強いからなんだ。暫く僕の立場になつてごらん

なさい、美代子さんの幸福を蹂躙してまで、平氣でこの婚約を實行することが出來るか何うか……』

『でも然うして頂かないと、私が姉さまに濟まないんですもの。』美代子は目尻にかゝつた髪の毛を、白い瓊のやうな小指で掻揚げながら言つた。

『それは解つてゐるよ。美代子さんの意味は解つてゐるよ。』早瀬はナプキンで短くつんだ口髭を拭きながら、『だけれど、そんな外面的のことでなしに、もつと深い事實について考へる必要があるとは思はない。婚約ばかりで、まだ戀愛關係が成立しないものと、婚約はなくてもお互に相許し合つたなかと、孰が大切だかさ。』

『え……。でも私たちは惡いことをしたのだわ。』

『惡い善いは別問題としてさ。』早瀬は宥めるやうに言つて、『假に……いや實際惡いにしても、今また僕が藤野さんと結婚するといふことは、二重に罪を犯す

『ことになると云ふことも、考へなければならない。』

『え、さうね。だけど、そんな理窟なんか如何でもいゝわ。』

『けど、僕としては忍びないよ。』早瀬は醋つぱいやうな顰め面をした。

『ぢや姉さまと結婚できないと言ふの。』美代子は惱しげに訊いた。

『たとひ出來るにしても、藤野さんが反つて可哀さうだと思はない？』

『それあ然う思ふわ。だけれど、貴方が姉さまを本當に愛してあげて下さりさへすれば、其の埋合せはつく筈ぢやないの。私それをお願ひしてゐるの。』

『それあ然うなんだがね。』早瀬は少し考へ込んだが、少したつてから、『それで貴方は、大槻家へ行くと言ふの。』

『え。』

『何だか可笑しいね。』早瀬は爲方なし、泣面をかくやうな笑ひ方をした。

美代子もほつと溜息を吐いた。

『いくら言つても駄目よ。私もう決心してゐるわ。』暫くしてから、美代子は呟いた。

『ぢや僕が藤野さんとの結婚を避けるとしたら……』早瀬はひどく困窘の色を浮べて、『人と自分を欺いて、藤野さんと結婚することは、僕には忍びられない。』

『それぢや詰らないわ。折角の私の苦心が、何にもならないんですもの。』

『では姉さんを欺いても、表面結婚すれば、美代子さんは滿足してくれるの。』

『だから私のことは忘れて、舊通り……もつと其以上にも姉さまを愛して下さらなくちや……。私は其の積りで大槻へでも何處へでも行くわ。だから貴方も其の積りで……それが私たちの罪を償ふための罰だと思つて……』

『さう。美代子さんが然う思ふならそれも可いかも知れないが……』さう言つて、早瀬はウヰスキーを飲干した。

美代子は剛情と思はれるほど、自分の説を主張したが、肚の底から然う決心してゐるのか否かは、早瀬にも少し疑はしかつた。然し大分興奮もしてゐるやうだし、不斷から姉思ひの彼女のことだから、ひどく感情的にもなつてゐたので早瀬も強くは爭はなかつた。

で、大分時が移つたので、そこから俥を僦つて美代子は間もなく歸つた。

『ぢや大丈夫だね。』早瀬は彼女を俥に載せてからも聲をかけた。

『え。』

『若しそれが不可いとしても、他に我々の行くべき道は幾何もあるからね。』美代子の氣持を緩和するために早瀬はさうも言つた。そして暫く俥の影を見送つてゐた。

暮春の暖かい晩で、路傍樹の若葉に映る灯影が美しくみえ、夜の町には初夏らしい氣分も漲つてゐたが、愁に封された美代子の心は、樂しい時候の移り變りさへ唯慌忙しい思ひがするだけであつた。途中からぽつり〳〵雨がおちて來たので、車夫は只有る暗い横町で、幌をおろした。

門前で俥をおりた美代子は、門の閾を跨ぐのも何となく氣が咎めたが、自分の決心を早瀬に告げて來たぐけに、いくらか心強いやうなせい〳〵した氣持ちにもなつてゐた。すると、門鈴の音を聞きつけて、玄關へ走つて出た女中のお春が捻つたとみえて、電燈がぱつと點いて、それと同時に面喰つたやうな彼女の顔が、美代子を凝視めた。

『おや。美代子さまで入つしやいましたか。』お春はさう言つて、間のぬけた表情をしてゐた。

『何うしたの?』美代子は胸騒しく訊ねた。

『お嬢さま、大變なんでございますよ。お姉えさまが何處かへ行したんでございますよ。』お春は息をはづませた。

『え、姉さまが……』

『藤野さまが、家出をなさいましたんですよ。』

『まあ。』と、美代子は胸をどきつかせて、目の色を變へた。

そこへ蒼い顏をした母も出て來て、美代子の顏を見ると、いくらか力を得たやうに、彼女を奥へ連込んだ。

母の話によると、藤野の家出をしたことに氣のついたのは、つい今し方のことであつた。彼女の來客が七時頃に歸つて、それと同時に追々日も迫つて來た藤野の結婚の支度のことで氣を揉んでゐる彼女が、ちやうど其時仕立あがつて來た二三枚の夏物を藤野に見せやうと思つて、お春を呼びにやると、一人では滅多に無斷に外へ出たことのない彼女がゐないと云ふのであつた。何處を探しても姿が見えぬといふのであつた。で、美代子と一緒かとも思つたが、美代子の出たのは、お春も知つてゐて、下駄まで出したほどであつた。其から二階にゐた弘一にも訊いてみたが知らなかつた。

『その時私の胸に、ふつと浮んだことがあるんですよ。』母は語つた。

『昨日だつたがね、あの子が結婚するについて、家の財産のことで少し相談があつて、その話しをしてゐると、何うともお母さんの好いやうとまでは可かつたけれど、姉さんが其時妙なことを言ひましたの。私よりか美代さんの方が先になるか知れないなんて……私しそれが氣にかゝつて、よく訊かうと思つたんですが、病氣を氣にしてゐるのだろうくらゐに思つて……其場はそれで紛れてゐたんですがね、……それが、どうも何か意味があつてのことではないかと思ひましたから、若しやと思つて捜してみると、あの子の鏡臺の抽斗に手紙あるぢやないか。』

（七）

母の萬貴子は、さう言つて其の手紙を美代子にも見せたが、手紙は何時もの藤

野にも似ず、至極簡短で淡泊したものであつた。

その文意でみると、今迄はわざと隠してきたが、自分の心は可也前から渝つてゐた。去年の病後に轉地をした頃……或はそれよりも前であつたかも知れない、早瀬とは稚い時分から知つてゐるので、更つて結婚をすると云ふことが、何となく不自然のやうに思はれてならない。是と云つて根據のないことだが、多分そんな感情から來てゐるのでもあらうが、近頃ふと河北といふ男の方に心が移つて行つた。そして若しそんなことができるなら、自分の代りに、美代子を早瀬に娶せてほしい。厚しらずの此の我儘な願ひをどうか許してもらひたい。で、自分は終生河北に身を寄せるつもりで、當分は旅にゐるが、何處にゐても幸福に暮らせる意だから、案じないでくれ——さう云ふ風の意味であつた。

美代子はぎつくり胸に徹へた。何もかも感づかれて了つたんだと思つた。姉に先んじられたのだとも思つた。そして自分を出ぬいた彼女を怨めしくも思つた。

後れた自分を腑甲斐なくも感じた。

『母さまには、其手紙の意味がさつぱり解らないのですが、美代子さんには何か思ひ當ることでもありませんか。』

『いゝえ。』と、美代子は目に涙を入染せながら應へたが、自責の念が強く彼女の頭腦を衝き動かした。

『早瀬を嫌ふと云ふのも不思議なら、河北と一緒になると云ふのも可笑いぢやないか。』母は美代子を詰るやうに言つた。

美代子は暗い顔をして、唇を咬んでゐた。この場合、何もかも正直に打明けた方が、どんなに氣樂だか知れないやうな氣がした。そして餘程それを言はうと、口まで出たが、早瀬の迷惑も考へない譯にいかなかつた。母の所思も恥かしかつた。

『早瀬が姉さんを嫌つたとでも言ふのでせうかね。』

『母さま、そんな事はございません。』美代子は強く否定した。

『それなら河北に唆かされたとでも言ふのですかね。』

『それは私知らないけれど……』

『河北がをり〳〵姉さんの轉地先へ行つた形迹でもありますかね。』

『え、私ちつとも知らないんですけれど……』

『早瀬を呼んで訊いてみたら、何か樣子がわかるかも知れない。お前は何か聞いたことはありませんか。』

『いゝえ、ちつとも……』

『して見るとやつぱり河北に誘惑されたものとしか思へませんね。それとも姉さまを母さまが買被つてゐたんでせうか。やつぱり母親の筋を引いてゐるんでせうかね。』

『それぢや姉さまが可哀さうよ。』美代子はは〻〳〵した。

『其にしても、こゝに美代子さんを早瀬に添はしてくれと言ふことがあるのですよ。』萬喜子は思慮ぶかい表情をして手紙を眺めた。『何か感ちがひをしてゐるんぢやないだらうかね、お前と早瀬のことをね――』

『え。』と、美代子は自然に首が垂れた。

『それに就いて。何か心當りでもありはしないかえ。』

『いゝえ。』

『それぢや矢張姉さまの淫奔から出たことなんでせう。結婚の先へ立つて、姉さまを唆かした河北も憎いが、たとひ何であらうと、あんな男と出奔するといふ藤野も藤野ぢやないか。母さまは悉皆瞞されてゐたのです。あの子が猫冠りだつたのです。さうとも知らずに、一生懸命結婚の支度で心配してゐた母さまは、何といふ馬鹿でせうね。』萬喜子は腹立しげな聲を曇ませた。

美代子は胸が一杯になつて、そこへ突伏して切なげに泣いた。

結　婚

（一）

美代子が、其の以前から話のあつた、目白の大槻家へ縁づいたのは、そんな騒ぎがあつてから、半年も經つた頃のことであつた。

この話は、最初早瀬や河北の郷里の先輩で、また藤野姉妹の父とも知合であつた辯護士で、大槻家の家事について、法律上の相談役である男から持込んだことなので、飛つくほどの縁ではなかつたが、母の萬喜子が其が目白界隈での舊家で、大地主だといふのに心が動いた。美代子たちの父は、長い間或官廳の屬官を勤めて、決つた收入で可也質素に暮して來た。そして其中から萬喜子が丹精で、二人の子供も教育すれば、公債や株のやうな物を遺したのであつた。そして人間が悧巧だとか、名譽があるとかいふやうなことが、必ずしも其人の幸福ではないと、萬喜子は考へてゐたので、大槻の當主が碌な教育も受けないで、頭腦が餘り好くないと云つても、格別苦にもしなかつた。その上美代子の氣象が勝氣で、女にしては緊張しすぎると云ふ心配もあつたので、多少愚かな良人を擇んだ方が、安全だと思はれた。

美代子が此の緣談を好いたのか、嫌つたのかは一寸不明であつた。普通誰でも若い女の厭がりさうな緣談であつたから、彼女も急度嫌つてゐるに違ひないと、衆でさう決めてゐたのかも知れなかつた。或は自分でも周圍の空氣にかぶれて、然ういふ風に決めてゐたかも知れなかつた。殊にも美代子の相談を受けた早瀬は、冒頭から處女の心持を理解しきつてゐるやうな態度で、彼女に同情を寄せた。思ひがけなく、しかし其がいかにも自然であるらしく、二人の戀がそこに釀された。

左に右美代子は、是非大槻へ緣づきたいといふ希望を、萬喜子に述べた。ちやうど其は、姉への義理で、厭な緣を强ひて自分から就くやうな形であつた。彼女

自身にも、自分の若々しい感情を虐げるやうに見えたが、早瀬の悲しむほど、彼女は悲しんでゐなかつたかも知れなかつた。

あの翌日——姉が出奔した次の日早瀬も報知をうけて、駈けつけて來た。そして一應萬喜子から秘密に色々のことを訊かれた。美代子と何か關係がありはしないかと云ふことも訊糺された。

『藤野が何か感ちがひをしたのではないかと思ひますが、何か思ひ當ることがあるなら、秘さずに私に言つて下さらんか。』萬喜子はさう言つて早瀬を詰つた。

『別にそんな事はない筈ですが……』と、早瀬は出來るだけ落着いて答へた。

『では矢張藤野の淫奔でせうかね。』萬喜子は傷ましげに言つた。

『何う云ふ動機ですか、私にも頓と判りません。』早瀬は氣毒さうに、

『私が至らないからでせう。』

『かうなれば、貴方も藤野に愛想が盡きたでせうが、それにしても河北と云ふ男は、何といふ德義心のない人間でせう。』萬喜子は涙をこぼした。

『どうか河北をお怒りにならないやうに……。私としては、お二人の幸福を祈るばかりです。河北は急度藤野さんを大事にしてくれるでせうと思ひます。』

萬喜子の考へでは、早瀬が居所を搜して、二人を引別けて、藤野をつれて來てくれゝば好いくらゐに望んでゐた。口へは出せもしなかつたが、其を期待してゐた。所が早瀬の態度は餘りに淡泊してゐた。萬喜子には其が不滿でもあり、心得がたい事でもあつた。

早瀬は多くを言はずに、引退つてしまつた。そして其からは、餘り顏出しをしなかつた。心から怒つてゐるやうに解れた。

そして其間に、美代子は自分の結婚を急いだ。

（二）

結婚の前後、美代子は惡夢に襲はれてゐるやうな氣がした。式は目白の大槻の

古い屋敷で行はれたが、それまでに舊式な玄關を新しく改造したり、洋風の應接室が出來たり、新夫婦の住居が、新築されたりした。

大槻家は江戸時代から、庄屋をしてゐたとかいはるゝ舊家で、その時分から斧を入れないやうな森林が、建物と庭園の周圍にまだ殘つてゐた。新建はそれらの地面を幾分切拓いて造營したのであつたが、儀式や披露もそこで質素に行はれた。無論親類や交際は然う澤山もなかつた。その親類も、概ね農民生活をしてゐる人達ばかりで、現代の空氣に當つたやうな顏は餘り見えなかつた。

美代子は以前見合をするとき、媒介者の辯護士につれられて牛込の彼女の家へやつて來た當主の周造をちらりと見たきりであつたが、其時は丸々と肥つた、色の白い、近眼鏡をかけた、ぼや〳〵した綺麗な坊ちやん風の青年のやうに思つた。で、別に嫌ひだと思ふほど厭味なところもなかつたし、聞いてゐたほどの愚かものとも思へなかつたが、教養がないので、何となく間がぬけて、調子はつれであつた。

結婚の晩は、彼女も頭腦が混亂してゐた。先々代の未亡人や先代の未亡人や、周造の姉や其の良人や、埼玉とかの分家の人達などに、それから其へと紹介され、盃を取交せられた。そして其の晩は田舍風に、夜おそくまで飲んで騒いでゐたので、彼女の宴席を退いたのも、可也遲かつた。

明朝は周造と二人で、美代子は新婚の旅に出た。九月の末で、まだ暑氣は殘つてゐたが、朝晩は大分冷氣になつてゐた。森のなかに蜩が鳴いて、初秋らしい風が肌にしみる程であつた。物馴れた年增の女中が、色々のことを手傳つてくれたが、美代子は島田を壞して、自分で束髮に取あげた。赭味をもつた太い髮毛が、始末に困るほどちぢれつぷりしてゐた。

『姉さまが何時でも、この毛を可羨しがつた。』美代子は鏡に嚮ひながら、そんな事から姉を思ひ出して、何だか厭な氣がしたが、早瀨と結婚するやうにと望んつた。

で、自分の戀を犧牲にまでした姉の親切を彈つけてやつたと思ふと、心強いやうにも感じた。姉の親切を感謝はしてもでもないと云ふ氣がした。

藤野からは、長いあひだ何とも言つてよこさなかつたが、最近に自分と早瀬の處へ、一度手紙が來て、居處は判つてゐた。一寸此方からも返辭は出しておいたが、相互の問題には、わざと觸れることを避けた。結婚するまでに、早瀬とも二三度顏は合したが、彼の足も自然に、牛込の家から遠ざかつてしまつた。

『ほんとうに大槻家へ行くのですか。』早瀬がさう言つて呆れてゐるとしか思へなかつた。

惱ましい一夜が過ぎた今朝、彼女は急に面窶れがしたやうに感じたが、周造と一緒に汽車に乘込んだ時には、自分の意氣張で、そんな風の運命になつたことが、急に悲しく思はれた。

周造は、二日醉のうへに、睡眠不足のぼんやりした顏をしてゐたが、まだ漸と二十四になつたばかりで、幼々しさうに口も利かなかつた。

汽車が戸塚あたりへ來た時分に、二人はいくらか話の緒がほぐれて來た。

（三）

國府津へ着いたのは、午前の十一時過ぎであつたが、周造は最近塔の澤に行きつけの家があるからそこへ行つてみて、若し面白くなかつたら何處か他へ行かうと云ふので、美代子の意嚮を糺した。

美代子はこの前、藤野が小田原にゐる時、一度この邊へ來たことがあつた外は、江の島や鎌倉や、三崎や葉山あたりの海岸を知つてゐるだけで、何處の溫泉場も知らなかつた。

『それとも熱海にしやうか。』周造は停車場前で、スウトケースをベンチに置いて、莨をふかしてゐた。

『貴方の好いやうに……』旅行に馴れない美代子は、さう言つて俛いてゐたが、陽氣が大分東京と異つてゐるのを感じた。

『熱海は暑くはないでせうか。』

『ぢや函嶺にしやう。』

『え、孰でも……』

暫く評議をしてゐたが、美代子は自分達の姿が人目に立つたので、早く自動車なり電車なりに乘つてしまひたかつた。結局は矢張塔の澤へ行くことになつたが、周造は乘物の選擇などについても一應美代子の意見を訊いた。美代子は自動車の方を選んだ。

やがて自動車は町を離れて松並木の街道を走つて行つた。野や森には、まだ暑苦しさうな日光が黄色く耀いてゐて、乾いた街道筋には白い砂埃と瘴氣が立つてゐたが、風は涼しく鬢髪を吹くのであつた。

『函嶺は涼しくていゝよ。行つたことがある？』などゝ周造はふわ〳〵したやうな氣持で訊いた。

『いゝえ。』と、美代子は極り惡さうに答へたが、『小田原きりしか知りません の。』

『小田原へ來たことがあるの？　それは何時頃？』

『去年の冬……それも姉の見舞に來たのですから、ほんの一兩日。』

『あゝ、田舍へ行つてゐるとかいふ姉さんだねえ。』

『どんな處へ片着いてゐるの。財産家？　實業家？』

『いゝえ。』と、美代子はちよつと暗い顏をしたが、『それもつい近頃の事なんですの。そして今度また私がゐなくなつたでせう。家は母と弟と二人きりですから。急に寂しくなつた譯ですわ。』

當らず觸らずの話をしてゐるうちに、周造はこくり〳〵眠りはじめた。自動車

はもう酒匂の町へ入つてゐた。

小田原の十字街を通過する時、周造は遽に眠りから覺めたが、美代子と顏を見合して罪のない微笑を浮べると、隱しから莨を出して、ぽか〳〵ふかし初めた。

美代子はこゝの海岸へ來て居た藤野の留守の間に早瀨と自分の間に發生した、秘密の愛について、獨りで考へてゐた。若し早瀨が豫期どほり藤野と結婚してゐたら、自分は今頃周造と一緒に函嶺へ行くやうなこともなかつたであらうと思はれた。

直に二人は塔の澤へついて、水に臨んで建てられた或旅館の二階の一室に落着いた。周造を知つた女中が來て、美代子をじろ〳〵見てゐたが、周造の顏色でそれと解つたらしく、忽ち調子を更めた。

美代子は何だか氣窮のやうな氣がして、この新婚旅行を心から樂しむやうな氣にはなれなかつた。早瀨のことを忘れてゐる間も、心は暗く霧に鎖されがちであつた。

(四)

晩飯の後、二人は緣側にある椅子に腰かけて、暫らく他哩のない話に耽つてゐたが、するうちに高い音を立てゝ目の下を流れてゐる水の上に暮色が掩ひかゝつて、向ふの木立のなかに點れた大きな電燈に照されてゐる部分ばかりが、きらきらと光つてゐた。寒い風が山からおろして來た。

美代子は然うして水を眺めたり山を見たりして、明いうちは紛れてゐたが、夜になると寂しい水の音や灯影さへ旅愁を誘ふ種となつて、頭腦が憂鬱になつて來た。その上昨夜結婚のときに感じたと同じやうな惱しさが、彼女の神經を苛んで、周造に口を利かれるのも厭だし、傍へ寄られるのも煩いやうな感じがした。

周造は照れ隱しに飮んだ酒が大分廻つてゐた。そして九時にもならないうちに、寢床を延べさせた。美代子は所在なさに、寢る前に今一度湯に入らうと思つて、

一人で浴場の方へ出て行つた。浴場には折ふし誰もゐなかつた。そして水の音が、一層高く凄く聞えた。美代子はそれに一種の不安を感じながら、出來るだけ長く、自分の心を孤獨の寂しさに曝さうとした。すうち素人とは思へない美しい女が二人入つて來たので、急いで湯から上つた。

床についてからも、彼の女は容易に眠れなかつたが、强いて眠つてゐるやうな風をして、じつと體を縮めて、細い息をしてゐた。周造も眠つてはゐなかつた。彼の神經も同じやうに苛々してゐるらしかつた。起返つて莨を喫したり、彼女に話しかけたりした。するうち夜が段々更けて來て、硝子戸を隔てた水の音が一層耳についた。周造はがばと跳起きて、湯に行つたが、やがて歸つてくると、緣側の戸を開けたりしてゐた。

『おい、起きて話さうぢやないか。』周造は美代子に聲をかけた。

美代子は息を殺すやうにして、默つて目を瞑つてゐたが、周造がどか〳〵枕頭へ來て顏を弄つたり何かするので、爲方なし起上つた。

周造は咽喉が乾くといつてベルを押してサイダを持つて來させたりした。

『こゝへ來て、サイダでも飮まない。』

『私澤山。』美代子は少し逆上氣味の疲れた目をして應へた。

『氣分でも惡いの。』

『いゝえ……、たゞ少し頭痛がしますの。』

『それぢや此處へ來て風に當るといゝ。』

『え。』美代子は應へたが、やつぱり白い敷布の上に、ぼつちやりした膝を揃へて、きちんと坐つてゐた。

『こんな處へ來て、堅くなつてゐても詰らないぢやないか。今夜は一生に一度しかない、新婚旅行の最初の一夜だからね。』周造はさう言つて、眼鏡越しに彼女の寢衣姿を眺めた。

美代子の耳には、それが空洞のやうな響を與へた。

『お互に、生涯の記念となるべき大切の日なんだよ。』

『……』

『他人同士のやうに顔を背向合つて親しい話もしないで、それで物足りないと思はない？』

美代子は毛脚の綺麗に揃つた美しい頸を垂れて、やつぱり默つてゐた。

『それとも家のことでも思ひ出してゐるの。』

『え。』美代子は顔をあげて、淋しい微笑を浮べた。

『ぢや、寂しいんだね。僕と一緒にゐても。』

『いゝえ。』美代子は爲方なし答へた。

『ぢや、何か恐怖を感じてゐるんぢやないか。』

『……』

『可笑しいな。』周造はやがて、そこに臥そべつて目をぱち〳〵させてゐた。

（五）

然し二人は長く然うしても居なかつた。彼等は硝子戸を少し透して、夜更の冷い外氣に皮膚の餘熱をさましながら、何時迄もほそ〳〵と話聲を立てゝゐた。周造は結婚前に經驗した戀とか愛が、若し有るなら、お互にそれを告白しておかなければならないと言つて、それを美代子に迫つてゐた。

『僕たちが恁うして結婚した以上お互に少しでも祕密があつては氣まづくて可けない。誰にだつて今迄に愛した男とか愛された男とか其でなければ心に思つてゐた人が一人や二人ぐらゐは急度過去にあるに違ひない。美代さんにだつてそんな浪漫のない筈はない。其の過去の祕密を有體に告白して、お互に心から許しあつてこそ夫婦ぢやないか。』周造はさう言つて若い妻を誘つたが、美代子は羞恥と不安に閉されて自分の過つた最近の出來事については、一切口を噤んでゐた。生

涯それを色にも見せまいと堅く心に誓つてゐた。

『ぢや貴方にはそれが有つて？』美代子は暫くしてから訊いた。

『僕にだつてないことはないよ。だけれど正直に言へば其等は皆實のない無駄花か、根を張る力もない草のやうなものだ。物にならずに濁んでしまつたのもあれば、氣紛れに芽を出したばかりで、直に枯れてしまつたのもあるよ。』周造は氣爽に答へたが、『處がその中に一つ厄介なのがあつて、現に今も問題になつてゐる。』

『それは如何なの。』美代子は目を耀かした。

『どんなのと言つて訊かれると少し困るが、しかし其も齋藤辯護士が、解決をつけてくれることになつてゐるから、心配はないよ、我々がこの旅行から歸るまでには、悉皆手が切れてしまふ筈だから。』

『そいぢや隨分深い關係だつたのね。』

『然うかも知れないね。』

『それで其は何處の人なの。女學生。』美代子は好奇の目を睜つた。

『そんなハイカラなんぢやないんだよ。』周造は顏を赧めた。

『ぢや藝者か何かなの。』

『そんな氣のきいたんぢやないんだよ。尤も滿更教育のない女でもないんだがそれに產れもさう惡くはないんだ。』

『身分は何なの。』

『お父さんは舊は役人で、今は株屋だと言ふんだがね、失敗してから行方も知れないさうだよ。で、學校も中途でやめて、阿母さんと二人で神田に淋しく暮してゐたんだがね、僕の商業學校の同窓がそこに間借をしてゐたから、時々遊びに行つてゐるうちに、親しくなつたのが初まりさ。』

『さう。』と、美代子は應答をしてゐたが、『それで深い關係になつたの。』

『僕は一時その女に夢中だつた。あの女のためなら如何なことをしても介意はないと思つたくらゐだつた。そしてその女と結婚できるなら、何を犠牲にしてもいいと思つた。で、二人は結婚の約束をしてしまつたんだよ。』

『今でも其の人のことを思つてゐるでせう。』

『それは思はないことはない。僕がそんな關係に陷つた最初の女だけにね。けど、一時のやうなことはない。それに僕は中頃遊びをおぼえて、少しは色々の女を知つたから、今迄のやうに其女ばかりに憧れると云ふこともなくなつたのさ。』

『ぢや、貴方は隨分荒んでゐるわね。』

『さう見えるかね。』周造は無邪氣に笑つたが、『だけど、それもやつぱり無駄花の一つかも知れないよ。あの女に純眞な愛があるか否か、僕は近頃それが疑はしくなつて來たよ。』

（六）

美代子は周造が、能くも新婚の自分などに、そんな事を平氣で話せたものだと不思議に思つた。同時に又周造にもそんな戀愛關係が結婚以前にあつたことを知つて、心が安まつたが、それに惹されて自分の秘密を打明ける氣にはならなかつたのみか、其れを知られるのが一層厭になつた。

『でも一旦然ういふ深い關係になつて、結婚の約束までした女を棄てゝも可いものでせうか。』美代子は自分の心持を考へるやうな風で訊いた。

『僕は最初は然う思つてゐたんだ。眞面目に結婚しやうと思つてゐたのさ。其女より外に、愛すべき女は世間にないやうに思窮めてゐた。然し近頃になつてそれは馬鹿なことだと氣がついたよ。』

『如何してゞせうか。』

『無論その女は僕に取つては、印象の深い女に違ひない。恐らく一生忘れることのできない女かも知れないんだよ。』

『そんなに美人なの。』美代子は羞かしげに訊いた。

『まあ然うなんだらうよ。だけれど其も近頃になつて、僕の見方が少し變つたやうに思ふよ。あの女一人が寶玉のやうに耀いてみえると云ふこともなくなつたやうだからね。』

『そんなに渝るものでせうか。』

『それも僕が女を知らなかつたからだよ。それに其女は可哀相だけれど、お袋は餘り好い性質ではなさゝうだからね。』

『それで貴方は厭になつたの。』

『それも然うだが、第一あの女が處女だか如何だか、それも疑はしくなつて來たよ。』

『そんな事が解つて?』美代子は紅い顏をして、偸むやうに周造の顏を眺めた。

『分明したことは僕には解らないが、あの母子の生活事情を綜合してゝると、餘り堅氣でもなさゝうなんだよ。』

『貧乏なの。』

『小綺麗に暮しちやゐるんだがね……』と、周造は首を傾げて、『あんな女の生活は僕には解らないよ。』

『ぢやお金取かも知れなかつたとでも言ふの。』

『さう。齋藤辯護士に言はせれば、てつきり然うなんだ。だが、それもあのお袋が惡いんだよ。だから女は一層不幸だよ。』

『もしも其人が、何うしても別れないと言つたら、何うなるんでせう。』美代子は深い目色をした。

『そんな心配はないよ。齋藤辯護士が綺麗に話をつけてくれる筈だからね。』

『でも其女が、ほんとうに貴方を愛してゐるんだつたら……可哀相ぢやないこと?』

『けど、爲方がないよ。諦めるより外はないぢやないか。』

『それは然うだけれど……』美代子は又自分の心持に引比べて、ぼんやり物思ひに沈んでゐた。

『だけれど世間は何うして、さう思ふやうに行かないんでせうね。相愛した男と女が、みんな違ひ〳〵に離れてしまふのね。』

『美代子さんもやつぱり然うだつたと言ふのかね。』

『いゝえ。そんな事ないわ。』美代子は言つたが、自然に顔が下つたが、『たゞ貴方の其人を可哀相だと思ふの。その人に怨まれるだけでも、私好いことはないかも知れない。』

『しかし彼の女だつて、餘り好いことばかりもしてゐなからうよ、少くともあの阿母さんがついてゐる以上は……』

時計を見ると、もう二時であつた。周造は驚いて戸をしめて寢床へ入つた。

『今日あたり、齋藤さんが彼の女の處へ話に行つたかも知れないよ。それを考へると、餘り好い氣持もしないね。』彼はさう云つて、溜息をついた。

分ま へ

（一）

ちやうど其頃、早瀬が休暇を貰つて、鄕里の町へ歸省した時のことである——

彼はこの春漸うのことで結婚式を擧げることになつてゐた藤野を失ふと同時に、偶然したことから相愛の關係に陷つた妹の美代子をも失つてしまつた。彼はそれを如何することも出來なかつた。美代子が夫れ程氣の進まなかつた大槻家へ嫁くことになつた動機も、半分以上は自分が作つたやうなものだと思ふと、結婚式の近づいてくるのを傍觀してゐられないやうな氣がした。自身の心持が寂しいばかりでなく、惱ましい秘密を抱いて、一生を盲目の運命の手に委ぬべく往いた

少い美代子の身の上を、心から傷ましく思はずには居られなかつた。

悲觀といふ語が、ちやうど現在の苦しい寂しい彼の心狀に當嵌るやうであつた。あれほど前途の希望に耀いてゐた早瀨も、今は生効もないやうに萎れてしまつた。青年の目の前に、山のやうに聳えてみえた人生の幸福も、何だか果敢ないものゝやうに思へて來た。何を目的に、毎日會社へ出て働くのか、解らないやうな氣がした。その上、彼は此の夏の暑さに、ひどく健康の衰へを感じた。

それも有つたが、しかし、藤野たちの母親の萬喜子のことを考へると、彼は一層濟まないやうな氣がした。美代子が大槻家へ嫁つたことは、彼女の希望であつたから可いやうなものゝ、藤野を横間から河北の手に浚はれて行つたのは、萬喜子に取つては、この上ない失望であつた。藤野が然うした背恩の態度に出て、家を出たことは、萬喜子の怒りであつたと興に、深い悲しみであつた。今迄は、二人の美しい姉妹を、何の障りもなく育てたことが、どんなに彼女の矜

知れないのであつた。萬喜子は二つの寶玉のやうに、彼等姉妹を愛したと同時に、少しでも瑕のつかないやうにと、夜寢る間も心に油斷をしなかつた。良人に死別れてからの寂しい萬喜子の心が、始終緊張を失はなかつたのは、全く其のためであつた。しかも最も彼女の愛を身にしみて有難くも、勿體なくも感じてゐた藤野が、健康の恢復後、急に掌の裏を飜すやうに、彼女を裏切つたことは、悲しんでも悲しみきれない程の大いなる歎きであつた。

それを一番よく知つてゐる者は、早瀨であつた。怨みを受くべきものも、彼自身であつた。

早瀨は自身の健康を養ふためもあつたが、主としては鄕里にゐる河北や藤野に逢つて、彼等の生活の樣を探るためであつた。同時にまた萬喜子の近狀を語り知らすためでもあつた。

河北夫婦は、その頃町へおりて暮らしてゐた。そこは眠つたやうに靜謐で、そ

して慵い處であつた。早瀬はそこに逗留してゐる間、親類の家にゐたが。河北の近狀も、狹いところだけに、直に解つた。水電は二つ同時に起りかけたが、二つとも資力が足りないので、合同運動が初まつてゐるさうだが、其が何うか恁うか纏まりさうだと云ふ話であつた。

で、河北のそれに伴ふ運命はといふと、彼は自分の利害や行係りから合同不賛成の方であるだけに、合同が成立てば相當の金をもらつて引退るより外はないであらうし、彼の仲間の會社を守立てるには、彼等の力では覺束ないと云ふのであつた。

早瀬はそんな噂を耳にしたので、ほゞ彼等夫婦の餘り得意でないことを想像してゐたが、訪問してみると、それが一層氣の毒の狀態だと云ふことを、直に感じた。

河北はちやうど留守であつた。藤野が獨り、門の傾いた町外れの家に、裏へ出て洗濯をしてゐたが、垣根の外から早瀬に聲かけられて、喫驚して起上つた。

（二）

四五十坪許りの庭が、ひどく荒れてゐた。果樹などが自然のまゝに草深い中に枝葉を茂らせて、中には赤く熟れ爛れた實の成つてゐる李などがあつた。藤野は背戸の方に取出した盥で、湯もじのやうな物を濯いでゐたが、其さへ彼女には似合しからぬ恥かしいことだのに、窶れた姿は一層見すぼらしかつた。

まだ九月の中旬であつたが、此處は朝晩冷氣が肌にしみるくらゐであつた。木の葉などは大分黄ばんで、草の實などの零れてゐる叢の片蔭には蟲が鳴いてゐた。けれど日中なので、殘暑の餘炎はじり〳〵してゐた。藤野は詫しい姿をしてぢやぶ〳〵やつてゐたが、門の方から裏へまはつた早瀬が、藤野さんぢやありませんか。』と竹垣の外から聲かけたので、ふと其方を見て、喫驚したさまが、早瀬には氣の毒でならなかつた。

『おや、早瀬さんですか。』藤野は息のつまるやうな思ひで、漸と口のうちで言つたが、極悪さうに胸がどき〳〵した。

『今御門の中から呼びましたがお答がありませんでしたから……』早瀬は帽子を取りながら言つた。

『まあ』と、藤野は袂で汗ばんだ顔を拭きながら、『では何うぞこゝからでもお入り下さいまし。』と急いで裏木戸をあけた。

『まあ、ちつとも氣がつきませんでした。私こんな姿をして……』

と藤野は亂次のない自分の風姿に氣が差しながら、座敷の縁先へ、彼を案内していつた。

荒れてはゐたが、間數は四つも五つもあるらしかつた。書院作りの座敷は八疊で、廂の深い路次緣になつてゐたが、藤野は座布團を取出して床の間の前におくと、其儘出て行つた。

藤野が着替をしたり、髪を直したりして、挨拶に出て來るまで、早瀬は布團も敷かずに矛然としてゐた。秋らしい淡い翠煙の立罩めた近い山の姿などが、樹木の隙間から微に望まれて、然うして坐つてゐると、荒い冷かな風が、部屋へ通つて來た。やがて木の葉が山颪に吹散らされて、冷たい雨が毎日續く〳〵あらうと思はれた。山の頂が白くなつて、霰雪の降る、寂しい冬が見舞ふであらうと想像された。

早瀬は少年期をこゝで過したゞけに、そんな氣分がよく解つた。そして其につれて、漂浪の身の藤野が、かうして寂しい今玆の冬を此處で迎へることになるでもあらうかと思ふと、何となく情ないやうな氣がした。

東京にゐさへすれば、彼女は立派に幸福なお嬢さんでゐられたのであつた。たとひ財産のない自分と結婚したにしても、是程の侘しい生活はさせずに濟む筈であつた。其上彼女には彼女自身の財産の分前があるのであつた。それは高々一萬

か一萬五千か、多くて二萬弱のものではあらうが、其だけでも彼女に取つては如何に心丈夫だか知れなかつた。それも波女は自然棄てゝしまふことになるかも知れないのであつた。

早瀬はそんな事を考へながら、いつか涙ぐましいやうな氣持になつてゐた。そこへ藤野が姿をかへて、お茶を煎れて來たのであつた。

『まあ、こんな悒鬱しい處で失禮ですけれど……それに初めは女を一人使つてをりましたのですけれど、先月行かれて了つたものですから、何もかも自分でしなければならないんですもの。』

『しかしお變りもないやうで……』

早瀬は傷ましげな目に、強ひて微笑を浮べた。

『は、有難うございます、貴方もお變りなくて……』

藤野は同じやうなことを言つて、早瀬と顏を見合したが、其の刹那に胸が一杯になつて、我知らず袂を顏にあてゝ泣いた。

懷かしさと悲しさに、波女は暫く涙を制めることも出來なかつた。

（三）

けれど藤野は、自分の感情にばかり溺れてゐるわけに行かなかつた。早瀬と結婚する筈であつた自分の運命が、こんな風になつたことについては、しみ〴〵早瀬に聽いてもらつて、怨みも言つたり慰めても貰ひたいことが、山程あつたが、其よりも妹の身の上が如何なつたかといふことが氣懸りであつた。しかし自分の口から其を割つて言ふことさへ出來なかつた。

軈て彼女は我と我を窘めるやうに、きつと氣を取直して顏をあげた。

『私何と云ふ馬鹿でせう。自分で勝手に自分の運命を擇んだ癖に、貴方にお目にかゝつて、愚痴なぞ言へた義理ぢやないんですね。貴方も定めし私の我儘をお怒りになつたでせうね。』

『何うしてゞすか』と、早瀬は惱ましげに言つた。『私は貴女を我儘だなぞと思たことは一度もありません。』

『では私が河北と家出をしたことを、何とお思ひなすつて？』

『其よりも、私は貴女にお詫をしなければならないのです。貴女の現在は、貴女が心からの希望から出たことゝは何しても思へないです。』

『では何ういふ風に……』藤野は反問さうとしたが、それも何だか知れ切つたことを訊くやうで、故意らしく思はれた。

『これは恐らく、私一個の誤解ぢやなからうと信じてゐます。』早瀬は心持含羞んだやうな表情で、無論河北をお擇びになつたのは、あの男について貴方に相當の理解があつたからでもありませうが、私の不謹愼な態度が因だといふことは能く解つてゐます。私は今それを正直に貴方に懺悔しなければならないのです。』

ときつとなつた。

『懺悔と仰しやるのは、美代子のことですか。』藤野は淋しい片頬に微笑を浮べて、『それならば今更貴方の口から伺ふまでもなく、私が疾に知つてゐることです。私のやうな愚鈍なものでも、それは能く解つてゐました。』

早瀬は暗い目をして、藤野を凝視めた。そして『では何にも言ひますまい。』と云つた風で、默つて面を俛れた。藤野に逢ふ以上、この恐ろしい瞬間が、何時かは來るものと、彼は覺悟してゐた。甘んじて審判も受けやうと豫期してゐた。しかし其がそんなに氣輕に藤野の口から切出されやうとは思はなかつた。彼は寧ろ飽足りないやうな不安を感じた。

『しかし其の事に就ては貴女にも多少思過しがあつたやうですが私も此場合辯解がましいことは言はない積りです。貴女の考へどほりに委しておいても介意ひませんの。』早瀬は暫くしてから言つた。

『それは、私の邪推もあつたかも知れません。けれど私には私自身よりも、美

代子が、大切でございます。私は心から妹の幸福を祈つてゐました。あの子の爲なら、どんな事でもしてやらうと、不斷から考へてゐたのです。それが貴方の幸福にもなることでありさへしたら、私など何うなつても可いと思ひました。』藤野はさう言つて、聲を曇ませた。

早瀬は自分の罪を責めながらも今までは幾分藤野の動機に疑ひを挾んでゐた。何の前觸も説明もなしに、波女が唐突に河北の胸へ飛込んで行つたのは、拗ねたのでなければ面當だと思つてゐた。女としては少し思切の好い、憎らしい態度だとも思つてゐた。然し面と向つて、波女の口から聽くと、其の感じは可也違つてゐた。

『それとも、私の邪推だつたのでせうか。』藤野は詰つた。

『いや。』と早瀬は顔を上げた。『貴女の目は正しいのです。私は眞實貴女を欺いてゐたのです。』

『ではやつぱり美代子を愛してゐて下すつたのね。』

(四)

『では貴女は、私が美代子さんとあんな關係になつても、少しも不快に思つてゐないんですか。』早瀬は返辭の代りに、さう言つて反問した。

『それあ何うだか解りませんわ。私だつて女ですもの。』藤野は淋しく笑ひながら應へたが、出來るだけ自分の感情を壓しつけるやうに、

『でも出來たことは爲方がないと思ひましたわ。私が何と言つてみたところで、何うすることも出來ないんですもの。』

『それで貴女は自分が退けば私が美代子さんと結婚するだらうとお思ひなすつたんですね。』

『私が外の男と一緒になれば、其の問題は容易く解決することぢやありませんか。』藤野はそれを少しも疑はないと云ふ風で應へた。

『では貴女は、我々の其後のことを何にも知らないんですか。』

『それを知りたいと思つて、貴方にも美代子にも其となし手紙を差上げましたの。』

『それは頂きました。』早瀬は惱しげに頷いたが、『併しそれの解決したのは、つい此頃のことですが、貴方の御希望は無駄になつたのです。無論貴方のなすつたことは、それ自身立派なことには違ひないでせう。私たちが結婚する爲ないは別として、貴女が私を思斷つておしまひなすつたのは、決して無意味ぢやありませんが、併し美代子さんは二人の關係を打明けるのは厭だと言つて、近いうち大槻家へいかれる筈です。』

『美代子が大槻家へ往くんですつて？』

『その心持は、貴女が河北君の愛を受けたのとは、少し違ふかも知れません。しかし事實は然うなんです。』

『然うですかね。』藤野はがつかりしたように言つたが、『あなたも其れは御承知なの。』

『美代子さんの心で決めたことを、私が拒んでみたところで爲方がないでせう。』早瀬は答へた。

『私もそれは心配しましたの。だけれど、事情が貴方がた二人を一緒にするより外ないと信じてゐました。貴方が自信をもつて、その事を母に打明けなすたら、譯のないことだと思つてゐましたの、美代子にしても其ほどの臆病な女ではなかつたでせうにね。』

『美代子さんの心理は複雜です。貴女の樣に單純ではありません。しかし二人のなかを貴女に感づかれたと思ふと、あの女は猶豫なく自分の態度を決めてしまつたのです。まるで戰鬪準備を調へるやうな敏速さでもつて……私は感心してしまひました。その事を私に告げに來た晩、あなたは牛込の家をお出になつたので

す。』

『ではあの時……』

『一夜の中に、私は双方から棄てられてしまつた勘定なんです。』早瀬は苦笑した。

『で、美代子はもう結婚しましたの。』

『それも兩三日に迫つたことです。』

『私はちつとも知りませんでした。』藤野は呆れた目色をしたが、

『今からでは、もう遲いでせうか。』

『美代子さんを引止めるとでも言ふんですか。』

『私が行つて話をしたら……』

『恐らく無効でせう。その上意氣張になつて、尚惡いくらゐのものでせう。あなたに逢ふことも好まんでせう。』

『美代子がそんな女でせうか。』

『しかし私のためには、一番心易い通道が開けられたことになるかも知れません。無論私は貴女にも濟まないと思ひます。美代子さんにも貴女以上に、苦痛を感じてゐます。しかし私の行く道は、貴女方二人で擇んで下すつたやうなものです。私は生涯其道を獨りで寂しく歩かうと思つてゐます。』早瀬は肅かな調子で言つた。

藤野は衿を掻合せながら、默つて俛いてゐた。

(五)

早瀬は暫くしてから、思ひ入つた調子で言ひ出した。

『それは其として、私は貴女に對して當然爲なければならない仕事をもつてゐると思ひます。』

藤野は深い感慨に沈んでゐたがふと夢のさめたやうに顏をあげて、

『貴方が私に！　それは如何なことでございます。』

『それも或は餘計なことかも知れません。貴女と私とは永久他人として、別々の道を歩いてゐた方が可いかも知れませんし。しかし私の心持としては、然うは行かないやうな氣もするのです。それに、貴女方の生活に私が交渉するのは、河北君に取つて、餘り快いことではないかも知れないのですが、私は貴女の良人として、私の友人として、河北君のためにも出來るだけのことはしたいと思つてゐます。それを爲せてもらひたいのです。』　早瀬はそんな風に打明けた。

『え、それは是非お願ひしなければなりませんの。』

『で、私は正式に、貴女方の結婚が、阿母さんの承認を得ないうちは、貴女もお苦しいだらうと思ひまして、その事で心配もしてゐますし、內々阿母さんの心持も探つてみたのです。』

『それあ然うなんですけれど、私は不孝の子として、やつぱり此のまゝにゐたいと思つてゐますわ。』　藤野は答へた。

『ぢや、貴女はそれに甘んじてゐられるんですね。』

『甘んじてゐる譯ぢやないんですけれど、今のところ、何うしても母に合す顏がございませんから。』

『其事も、私は阿母さんに言解きたくて堪らないのです。私の罪を懺悔して、貴女の潔よい心持を知らせないうちは、苦しくて疚しくて、爲方がないのです。しかし其を言出すことは、貴女の本意でもなからうし、美代子さんも其を大變厭がつてゐるんです。無論それも時の問題だらうと思ひます。時がたちさへすれば、美代子さんも其を發表することになるに違ひないのですからな。』

『え……でも私としては、それだけは永久に祕密にしておきたうございます。美代子が大槪へ片着く上は、それを言ふ必要は少しもないのですもの。』　藤野は心から言つた。

『其にしても、貴女方の結婚を承認することだけはね。』

『さあ、如何いふものでございませうかね。母が私たちを許してくれやうとは思へませんわ。』藤野は首を傾げた。

『阿母さんは何だか、貴女がたの間を割いて貴女を取戻したいやうなことを言つてゐられるのですが、しかし夫も貴女の出方一つでは、さう悲觀するほどぢやないかも知れません。』

『私たちが、母に謝罪るんですか。』

『まあ然うでもしたら……』早瀬は忸怩とした調子で、『それには私としても極力阿母さんの感情を融和する方法を講ずる積りですけれど……』

『それが出來ればね。』と藤野は打萎れて、『ですけれど、其も河北の生活が、もう少し如何にか目鼻がつかなければ。』

『河北君の現狀はどんなですか。』

『餘り思はくしもございませんの。』藤野は面を赭らめて、『それに今の處、收入が少しもありませんから。』

『然うですか。』

『御覽下されば判るでせうが、私女中もおかないで怎うして働いてゐるんですもの、其も好んでしたことですから、少しも厭ひませんけれど、でも時とすると心細くなつて、獨で泣いてゐることもございますわ。』藤野は目に涙を入染ませた。

『お察しします。』と、早瀬は心のうちで言つたが、辭も出なかつた。

『それも可うございますが、河北の家の人達がみんなで、私を妙な目で見るのですもの。私が淫奔な亂次のない女か何ぞのやうに……其が私には耐ら無い侮辱なんです。』藤野は聲を顫はして又、袂で顏を蔽ふのであつた。

早瀬は何と云つて可いか、解らなかつた。慰める術もなかつた。今迄そんな目に逢つた覺えのない彼女としては、それも道理だと思つた。

『では、貴女は河北君の家族に逢つたんですか。』

『えゝ、あの人の家に、四日も五日もゐましたわ。あの人達も皆な好い人らしいのですけれど、河北の今迄が今迄なんですから、信用のないのも無理はないので す。それに財産なども、河北の話とお母さんの話とでは、大變な違ひなんでござ いますもの。』

『そんなこともないでせうが、子供を一人東京へ出して學問させると云ふのは、親に取つては大變なことですからね。』

『然うなんでございませうね。』と藤野は嘆息するやうに言つたが、

『其につけても、私などは母を有難いと思ひましたわ。自分の子でもない私を美代子さん以上にも愛して下すつたのですもの。私世の中へ出て他人と交際つて、しみ〴〵然う思ひました。』

『それも然うでせうが、一つは貴女の心持にもあることです。貴女が阿母さんのことを思つてお上げになるから、阿母さんも自然貴女を可愛く思はれるのでせう。』

『どこに何うしてゐるか判りませんけれど、私生みの母のことなぞ、夢にも想ひ出したことはございませんでした。唯此處へ來てから、ふと思ひ出して、時々何だか變な氣になることがございますの。同じやうな宿命が、私にも着纏つてゐるのぢやないか、知らなんて……』

藤野は不安の色を浮べた。

『まさか、そんな事もないでせうが……』と、早瀬は打消したが、薄々耳にしてゐる藤野の母の噂を思出させられて、不快を感じた。

暫くしてから、『とにかく一度御上京なすつては如何ですか。』

『母に逢ふ爲にですか。駄目ですわ。今は迚も駄目です。』藤野は首を掉つた

が、前途を考へると、一層心細いやうな氣がした。或はこのまゝ永久に母に逢ふ機會がないやうにも思はれて、胸が重苦しかつた。今のところ、二三枚あつた着物も失してゐたし、指環や時計のやうな物も、いつの間にか體を離れてゐる。

それよりも氣にかゝるのは、河北は水源地を掌に入れるまでにも可也金を使つた。それに、今でこそこんな貧乏暮しはしてゐるけれど、此處へ來たてには、彼も鄕里への虛榮もあつたし、事業を起すについての觸込としても、二人の生活は酷く贅澤なものであつた。彼はまた自分の企てが單なる虛業でないことを示すために、この夏中實際の設計にも取かゝつてゐたので、それにも少からぬ入費をかけてゐた。無論それは彼一人の負擔ではないにしても、それでも萬以上のものを持出してゐた。そして其部分は、彼の負債として殘つてゐるのであつた。後の資力が續かなかつた。彼等の獨力では其の上仕事を進めることが、困難であつた。一方の會社に合同するか賣るかするより外なかつた。河北は汗みづくとなつて、

資金の募集に奔走してゐるのであつたが、望みは少かつた。有利な條件で合同するより外、爲方のない形であつた。しかし河北に取つては、頭を下げることの出來ないやうな關係にある人たちが、一方の會社に幅を利かしてゐた。そして合同の相談も、自然彼等から手を引くことになつたが、同時に河北たちの企を壓潰さうと意氣込んでゐた。彼は意地にも再び合同說を持出すことができなくなつたと同時に、事によると今迄注込んだものを、悉皆自分の損失として、背負はなければならなかつた。

實際河北は苦境に陷つてゐた。藤野はその事については、河北から何の話も聞かなかつた。しかし彼の仲間からは、ほゞ成行を聽かされてゐた。

藤野はそんな斯んなを、思出すとこの先生きてゐる空もないやうに心細かつたそして其を早瀨に打明ける氣もしないのであつた。

で、早瀬は河北の事業の成行を心配してくれたけれど、藤野は其等の詳細なことを話す氣もしなかつた。

『何ですか私にも話もしませんですけれど、河北は少し無鐵砲な男ですから、何うせ、得は取れないに極つてをります。今迄にさへもう一萬四五千圓も投出してゐると云ふお話ですけれど、其なぞも隨分無理をしてあるに違ひないんでございます。』藤野は心配さうに言つた。

『お父さんから金の出た形迹もないですか。』

『えゝ、迚も、私たちの生活費も貰へませんわ。』

『すると其の金は、河北君が何處からか融通したのですか。』

『まあ、然うでもしませんければね。』藤野は答へたが憂苦の色は隱せなかつた。』

で、藤野の想像によると、其幾分——事によると殆んど其の全部が、彼の相續權もなくなつてゐる父の不動産を抵當にして借入れたものかも知れなかつた。若し然うだとすると、彼は父の私印を盜用してゐるのだとしか思へなかつた。そして其を事實とすれば、破綻が近き將來に來るに違ひないのであつた。

早瀬は憂愁に充ちた藤野の顏色を見ると、心から彼女を憫まずにはゐられなかつた。そして若し自分の力で慰められることなら、出來るだけのことは爲やうと思つたが、問題が大いだけに、今が今何うしやうと云ふ思案もつかなかつた。

『けれど、河北君にも孰れ成案があるんでせう。貴女は餘り御心配なさらん方が可いですよ。』早瀬は力づけた。

『然うですとも。私が何と思つたつて駄目なんですわ。』

『河北君にしても、貴女を幸福にしたいばかりに、一生懸命になつてゐるんですから、然うへまな事もしますまい。』

『それは然うなんですの。』藤野も其の語に乘つて、『それに最初私に言つてゐた事もございますし、牛込の母や貴方に對しても、餘り恥かしい生活はしたくないと云ふ氣もありますから、勢ひ成功を急ぐといつた處は十分ございますの。それを思ふと、河北も氣毒は氣毒ですの。』

『僕も同情します。』

『だから私先刻もさう思ひました。これが正當な結婚でありさへすれば、私が亡父から貰ふ筈になつてゐる分前くらゐは、あの人にやつても可いのに、其も貰へなくなつて了つたんですもの。』

『しかし未だ絶望といふ譯ぢやありませんよ。貴女の結婚が阿母さんの承認を得さへすれば……』

『いゝえ、私そんなものを戴かうと思つてもゐませんわ。』

『何故ですか。』

『私の良心が許しません。——素と〳〵あれは父が、體の弱い私の行末を案じて、獨身で生活して行けるやうにと貯へておいてくれたのが臺になつてゐるんださうですけれど、今となつては矢張弘一に讓るのが、至當だらうと思ひますよ。』

『そんな必要はないでせう。弘一君には弘一君の分があるでせうから。其につけても貴女は何うしても阿母さんの機嫌を取つておく必要があります。』

『私もう、そんな事思ひません、』藤野は言切つて、二度と口にもしなかつた。

時が思ひのほか經つてゐた。で、早瀬は河北が歸つたら、久振で町で一緒に晩飯でも食べやうと心構へをしてゐた。けれど彼の歸りが遲いので、それは又機會を待つこととして、藤野と寂しく別れた。

公園にて

(一)

早瀬は町外れの藤野の家を出で、獨りふら〳〵と町を歩いてゐた。秋近い日は短くて、空は何時しか暮れかゝつてゐた。

彼は想つたよりも藤野が不幸に陷つてゐるのを、面り見て來ただけに、自分の爲て來たことの結果が明かに判つたやうな氣がして、悔恨の情が一層深かつた。河北の生活が目の前に見えるやうであつた。

彼は町の高臺とも云ふべき方へ足を運んでゐた。そして幾箇かの町を通つて、公園へ入る廣い坂を登つてゐた。昔の城跡にある兵營から悲哀なやうな喇叭の音が聞えてゐた。彼は深い木立のなかの道を辿つて、昔し藩侯の庭園であつた公園のなかへ入つていつた。木立の奥から微かな瀑の音が聞えたり、水のほとりにある料理屋の貸席のやうなものゝ內から洩れる灯影が見えたりした。空は曇つてゐて、星影が疎にみえた。

暫くすると、彼は廣々した庭園の平地にある池の傍にあるベンチに腰を卸して莨を喫してゐた。夜の散歩に出てゐる學生の影などがちらほら目についた。池の對岸には、深い木立を負つた水樓の灯がちら〳〵してゐた。靜かな晩であつた。繋いである小形の屋形船の舷を舐める水の音さへ、びちや〳〵と耳についた。

早瀬は然うして憩うてゐるうちに、ひどく感傷的な氣分に引入れられてゐた。こゝで過された樂しい少年の頃の記憶と混交になつて、藤野のことが遣瀬ない哀愁を唆るのであつた。

『己はやつぱり藤野さんを愛してゐるのかも知れない。』早瀬はそんなやうな感じがした。

藤野の愁ひに沈んだ顏が、哀れに目に浮んで來た。それに何かを訴へてゐるや

うな、ひどく自分を卑下し悲觀したやうな氣持の顏であつた。その潤んだ目を考へると、彼もまた自然に深い憂愁に引込まれるやうで、胸苦しかつた。

藤野は暗いその運命が割出されてゐるとほりに、不斷から哀れに寂しい女であつた。深いことは早瀨は聞いたこともなかつたけれど、彼女の母も、早瀨や河北の鄕里である此の町の產れであつた。そして士としての昔しの家柄もお歷々の方であつた。彼女がその頃まだ漸く書生上りの藤野たちの父と戀愛關係から一緒になつたのは、まだ年の若い頃であつた。彼女が貞操上の問題で、そこを逐はれたのは、藤野がまだ物心を覺えないほどの事であつた。其の生みの母のことを、萬貴子は一度も藤野に言つて聽かせたことはなかつたが、大分大きくなつてから、人を介して、金の無心に來たことなどがあつたので、自然藤野の耳へも薄々入ることになつた。藤野は自分にも不思議なほど、母子の關係や情味などについて敏感であつたが、たゞ其だけのことに觸れたゞけで、その奥底は想像もとゞかぬ暗い陰のなかに葬られてゐた。藤野はそれを知りたいと思つたが、知るのが可恐しくもあつた。物足りない感じは始終あつたが。知らずに過ごした方が、寧ろ安氣なやうにも思はれた。

とにかく自分の運命の、餘り明るいものではないことだけは、年と共に彼女の頭腦に滲込んでゐた。そして其が彼女の憂愁の寂しい氣分を作つてゐた。

早瀨はその心持を知つてゐるだけに、一層哀に感じてゐた。生涯愛してやらなければならぬ責任が、自分に在るやうにさへ思はれてゐた。夫が戀であつたか否かは、彼にも不明であつた。若し愛ならば、それは憐愍から來た犧牲的な氣持のものであつたかも知れなかつた。

早瀨はそんな思ひに沈みながら肅やかな夜の空氣に浸つてゐた。

すると爾時、對岸の水樓から出た人影が、彼の目にフキルムのやうに映つた。それは男と二三人の女との影であつたが、灯影の蒼く反映した料理屋の玄關前は

それらの人たちを送り出すために、一時笑聲などが陽氣に搖動いてゐるらしかつた。

（二）

それと同時に、早瀬もふいと跳あがるやうにベンチを離れて、機械的に池の汀に沿いて動きだしたが、暫くすると是も此方へ歩いてくる男女の人影と出逢つた早瀬は二三間傍へそれて遣過さうとしたが、ふと氣がつくと、その男の樣子が河北に似てゐるやうなので、振顧つてゐると、彼もまた此方を振顧つてみてゐた。

『河北君ぢやないか。』早瀬が聲をかける前に、彼は面を隱すやうにして、其まゝ行過ぎやうともしたが、急に立停つた。

『誰だい？』河北は訊いた。

『僕だよ。』早瀬はさういつて、傍へ寄つて行つた。

女連は二三間先へ行つてしまつた。

『うむ、誰かと思つたら、早瀬君か、いつ遣つて來たんだ。』

『つい二三日前。』早瀬は答へた。

『今君の家を訪ねたところだ。』

『僕の家を？』河北はちよつと不快な語調で言つた。そしてきらりと眼鏡を光らせて、早瀬を見た。

『今まで藤野さんと話してゐたけれど、君の歸りが遲いので、又出直さうと思つてね。』早瀬は河北を極惡がらせないために、心易げな風で言つた。

『君が僕の家を訪ねたんだつて？』

『あゝ。』

『そして……一體、それが如何したといふんだらう。』

『何うして？』

『何うして？　君から訪問を受ける筈はないぢやないか。』

『それは一應うも思へるだらう、だが別に不思議はない。』

『だが君は……僕が君に平氣で逢へる筈のないことを知つてゐるだらう。』

『それは知つてゐる。だが、あの問題のために、君と僕との友誼まで……』

『だが僕の行爲が、二人の友誼に何等の變化が來さないとは、君も思つてゐまい其とも君の寛容で、別に意に介してもゐないと言ふのかね。』

『僕は其の問題については、今何にも言ひたくはない。』

『問題にするほどの價値がないと言ふのかね。』 河北は嵩にかゝるやうな口の利き方をした。彼は可也酒に醉つてゐた。

『まさか其れほど君等の行爲を侮蔑する積りはないよ。だが、とにかく安心したまへ。』

『安心しろ？』

『僕が君に對して、敵愾心をもつとでも思つてゐられては、話がしにくいんだから。』 早瀬は落着いてゐた。

『ぢや、藤野はやはり君の者だとも言ふのか。あの女の愛は君のものだと言ふのかい。』

『笑談ぢやない。』 早瀬は笑つて、

『藤野といふ人がどんな女だか、君も知つてゐる筈ぢやないか。あの人が、自分を欺いて、心にもない愛の押賣をするやうな二重人格の女か否か……』

河北は苦悶の色を浮べた。そして苛々したやうな風で、『それは君の眞實の話なのかね。』

『何うして？』

『若しさうなら、君は平氣でゐられない筈だ。友誼どころの騒ぎぢやないんだ。』

河北は熱烈なやうな調子で言つた。

『僕にも苦悶はあつた。今もあるかも知れない。けれど、其を言つたところで初まらない、左に右こゝは道路だ。君も醉つてゐる。』

『で、つまり何うなんだ。』河北は捂かしさうに言迫つた。

（三）

『つまり君と静かに話がしてみたいんだがね。』と、早瀬はやつぱり落着いてゐた。そして先へ行つた女連の方へ目をつけて、『君の感興を殺いでも悪いが、少し其處いらを逍遙いてみないか。』

『可し、それでも可い。』河北は元氣よく受けたが、何となく底氣味が悪さうに見えた。彼自身、まだ確乎藤野の心を摑んでゐないやうな物足りなさを、不斷から感じてゐたが、目前に早瀬が現はれてみると、不安の念が一層深かつた。現在の事業の狀態や、今の不檢束な爲體を見られたことも、不快であつた。

河北は女の方へ近よつて、雫時何か話してゐたと思ふと、旋てまた早瀬の傍へ引返して來た。

『しかし差閊へはないのかい。』早瀬は訊いた。

『いや決して……』と、河北は素直に受けて、『此の頃仕事のことで、人と時々酒を飲むことがあるんだ。』

『そして……君の仕事が順潮に行つてゐるので？』

『まあ〳〵お蔭で……』と、河北は輕く頷いたが、其の話に觸れるのは好ましくもなかつた。

『それは結構ぢやないか。』

『餘り結構でもないんだがね。』河北は苦笑して、『それに僕の性格が事務家にできてゐないので……』

『そんなやうな事を藤野さんから聞いたよ。』

『何を……』早瀬は少しまごついた。

『つまり君の氣質が、禍ひをなしてゐるといふやうなことをさ。』と、早瀬は笑談らしく言つて、『しかし其も悪い意味ではないんだ、で、それに就いて、藤野さんも心配してゐたよ。』

『ぢや、君に愚痴でも零したのだらう。』

『いや、そんな譯ぢやない。あの人は堅い決心をもつてゐるやうだ。美代子さんと違つて、藤野さんは忍從の徳をもつてゐるからね。』

『だが、そんな問題は、君に取つて何でもない。僕に何の話があるか其を聞かう。』

河北は氣を苛立たせた。

『それも君たち夫婦のことについてだがね、君たちは一體永久に牛込の家へ出入をしない積りか。』

『君達夫婦だ？』

『無論さ。君たちを夫婦といふのに差閊はないぢやないか。僕はいつまでもあの阿母さんを怒らせておくのは、君達の利益ではないし、餘り氣持のいゝことでもなからうと思ふ。』

河北は返辭もしないで、俛いて歩いてゐた。

『今も其事で藤野さんと話したんだが、近いうちに未亡人の承認を得るやうな運びをつけた方がよくはないか。』

『駄目だ。少くとも今はそんな考へはない。』

『君の自尊心が、夫を許さないんだらうが、其事がどんなに未亡人の頭腦を惱してゐるか知れない。』

『あの未亡人が、藤野を僕にくれる氣遣はないよ。僕の不信用は今更のことぢやないんだ。』河北は絶望的に言つたが、『しかし君が何うしてそれを言ふんだ。君の力で何うかしやうとでも云ふ興味があるのか。』

『興味なら興味でもいゝが、僕は君たち夫婦に恩を賣らうとか、君たちの生活に

交渉を持たうとか言ふやうな氣紛れから言つてゐるんではない。藤野さんが、君の懐へ飛込んで行つた動機を知つてゐるから、僕の氣持の上から、君達を放抛つておけないのだ。』

『藤野の動機とは、一體それは何だ。』河北は辭色を變へた。

『まあ言つてみれば、僕等の結婚が、眞實の心持から湧いたものではなくて、外から強ひつけられた形だつた。それが何となく氣窮りだつた。』早瀬は言つたが自分にも飽足りないやうな氣がして、心苦しかつた。

（四）

『ぢや、君は藤野と結婚する氣はなかつたと言ふのだね。』河北は何事をも分明させておきたいと云ふ風で、突込んで訊いた。『そして其が藤野の氣の毒な結果になつたから、僕達のことについて、何か心配してくれやうと云ふんだね。』

『さう單純に解釋されても困るがねえ。』早瀬は語を濁らした。

『僕にしても、藤野が幸福だとは思はないよ。しかし其事については、僕自身に責任がある。第三者の御心配は煩はさない積りだ。』河北はきつぱり言明した。

『君は僕が何か餘計なお干渉をするとでも言ふのかね。』

『露骨にいへば、そんな事になるかも知れんね。僕ばかりぢやない、藤野だつて然うだらうと思ふ。』

『僕の友誼的好意をも拒絶するんだね。』

『まあ何であらうと、僕等には僕等の生活がある。僕等は僕等のことを、自分で處理していかなければならんよ。』

『それは勿論のことだよ。』早瀬は少し氣色ばんだ調子で、『君にさう言はれゝば一言もないが、しかし未亡人の關係は何うするね。』

『そんな事はどうでも可いぢやないか。僕等の結婚が承認してもらへないんなら貰へないでも可いよ。哀願してまで、強ひて未亡人の御機嫌を取る必要は少しも

ないよ。』河北は答へた。

『然うか。それなら其でも可い。』早瀬は失望の色を浮べて、『君にそれだけの自信があるなら、思ひ通り遣るがいゝ。僕は蔭ながら君達の幸福を祈るばかりだ。』

『有難う……といひたいが、それも君の勝手だよ。僕等に交渉のない事だ。』

『それも然うだ。』早瀬は自分の感情を壓潰すやうに言つた。

『ぢや、これで失敬しよう。』

二人はいつか公園の出口の森の小徑へ出てゐた。瀑の音がだう〳〵と聞えた。道が左右二つに岐れてゐた。

早瀬も爲方なし別れやうとしたが、ふと立停つた。

『だが河北君、君が僕の好意を受入れないのは介意はないが、未亡人が藤野さんを君の手から、何うしても取返さうと言つたら、如何するね。』

『其時はまた其時だ。』河北は言の下から應へて、『それに然うなれば、藤野自身で處決するだらうからね、僕はそこ迄立入つて彼女の意志を束縛する權利はないよ。あの女が君と結婚しなかつたと同じ意味だ。』

『可し、僕もその積りで、この事については一切口を利かないことにしよう。』

早瀬も自分の態度を言明するやうに言つた。

『それは君の勝手だよ。』河北はいくらか穩かな調子で言つた。『僕にはその必要がないといふだけの事だ。』

『僕は先刻から、大變餘計なことを言つたやうだ。』早瀬は自ら冷笑ふやうに言つた。

『それも君としては、何か必要があつたんだらうからね。——ぢや、こゝで別れても可いだらう。』

『では失敬。』

早瀬は思斷わるく河北と袂を分つたが、河北が彼に示した態度の立派なことを

考へると、この不意の會見が、どんなに自分の權威を傷けたか知れなかつた。

『彼奴あれ程いら〳〵してゐながら、勝利者の怜を何處迄も傷つけまいとしてゐる。』と、早瀬は考へれば氣毒でもあつた。

で、彼は悄々と暗い坂道を下つた。路傍にある街燈の光が、枝葉の繁みを青黒い色に照して、夜が大分更けてゐた。

分れ

(一)

藤野はその晩彼が早瀬に逢つたことを、一寸河北の口から聞かされたが、其の會見の樣子については詳しく知らなかつた。

『己は早瀬などに縋つて、お前の阿母さんに委協を申込むやうなことは不快だ。お前も勿論然うだらうと思ふ。』河北は然う言つてゐた。

藤野も一應それに異存はなかつたが、然し別の意味で、全然早瀬の親切を拒むことも出來ないと思つた。

『私たちは其で可いとしても、母も年を取つてゐますから、此まゝ死別れになるやうなことでもあつては、母が可哀相ですわ。』藤野は言つた。

『一度私を早瀬さんの處へやつて下さいませんか。然うすれば、貴方の體面も傷けず、私の身も立つやうに、あの方によく話をしますから。』藤野は河北の機嫌の好い時に、そんな希望を述べた。

河北もそれを強ひて拒みもしなかつた。で、彼女は折を見て、或時早瀬を訪ねた。

それは早瀬が彼女を訪ねてから二週間の餘も經つてからのことで、此町の陽氣も大分變つてゐて、山から下してくる朝晩の風が可也いら〳〵してゐた。

早瀬はあれきり、河北に逢はうとも思はなかつたし、藤野のことも氣に懸りな

がらも、此上何か交渉をもつのも厭だつたので、河北との會見が、すつかり破裂に了つたところで、一ト月弱たつてから、彼は徐々この町を去らうとしてゐた。そこへ藤野の訪問を受けたのであつた。

二人は早瀬が逗留してゐる親類の家の二階で、再び顔を合したのであつた。

『もうお立ちになつたか知らんと思ひましたけれど……』藤野はおど〳〵した調子で言つた。早瀬の更つた樣子では、河北との會見の結果、自分に對する彼の氣持にも、多少變化を來してゐるやうに考へられた。

『そろ〳〵立たうかと思つてゐる處です。貴女にも其後お目にかゝる筈でしたけれど、何も河北君の感情を害してまで、伺ふこともなからうと思つて。』

『多分さうだらうと、私も思つてゐましたの。河北が何を申したか知りませんけれど、私としましては全く然うもまゐらない點もございますものですから。』

『僕もあの晩、自分に矛盾や虚僞のあることが、看々判つてゐるので、隨分苦しい思ひをしたのです。僕は河北君の前に、何もかも告白して了はうかと、餘程さう思ひました。そして河北君の同情に縋つた方が、どんなに心易いかしれないと思ひました。しかし然うすれば僕の都合はいゝが、貴女の立場の苦しくなるのは判り切つたことです。』

藤野は頷いた。

『私も時々そんな事を思ひますの。河北を欺いてゐるのが苦しくて爲方がないのでございます。ですけれど、是れだけは如何なことがあつても、死ぬ迄話さない積りですから、貴方も何うぞ……。』

『その事の是非は措いて、僕は貴女の感情を尊重したいと思つてゐます。』早瀬は敬虔な表情で言つた。

『それに河北は何と言ひましたか詳くも聞きませんでしたけれど、私この頃連に母のことが思はれてならないんでございますの。』藤野は目を曇ませて、『此間貴

方にお目にかゝつてから、何だか急に母が懐しくなりまして、此儘死別れにでもなるやうなことがあつては大變だと云ふ氣がしますの。』

『まさかそんな事もないでせうが、其感情は阿母さんだつて同じです。』

『それに美代子のことですわ。』と、藤野は手巾で目をふいて、『私は何うせそのつもりで家を出たんですから、何處で野垂死をしたつて介意やしませんけれど、あの子にだけは幸福な生涯を送らせたいと思ひますの。』

（二）

實は藤野は此頃體の調子が少し變つてゐるのに氣がついてゐた。まだ醫者には診てもらはないけれど、若しそれが姙娠だとすると、先のことを考へておかなければならなかつた。其は自分の籍の事などであつた。

其事も河北に話さうと思ひながら、彼の現在の心持では如何することも出來ないのは知れてゐるので、話す張合もないのであつたが、母との和解の緣が切れて了ふことは、此上ない苦痛であつた。そして其には早瀨を賴むより外ないことも明かであつた。早瀨にも其心持は解つてゐた。

『美代子さんのことなら、心配はないでせう。』早瀨は應へて、『其よりも僕としては貴女方の結婚を、阿母さんに承認させるといふことは、最も必要だらうと思ひますが、其も河北君の態度があれでは爲方がないかも知れません。で、僕はこのまゝ、一旦歸京します。そして貴女方のことについては、阿母さんに何ともお話はしない積りです。僕は河北君の仕事が、何うか好い工合に發展すると同時に貴女が御自身で、阿母さんにお逢ひになる機會の來るのを祈つてゐます。』と、しみ〴〵言つた。

藤野は何だか突放されたやうな心細さを感じた。

『それも何時のことか解りませんわ。』藤野は失望の色を浮べて、『もう永久母に逢ふ時もないだらうと思ひます。お歸りになりましたら、私が大變心細がつてゐ

ると仰やつて下さいまし。そして私はもう迚も駄目ですから、お諦めなすつて下さいます様にと、然う言つてゐた……』と、聲を曇ませた。

早瀬は何と言つていゝか解らなかつた。

『わたし美代子さんにも、一度逢ひたくて爲様がございません。そしてあの人に怨みを言つてやりたくて堪りません。なぜ大槻なぞへ片着いたんですつて……』

藤野は傷心の口調で言つた。

早瀬は心から動かされずにはゐられなかつた。美代子の結婚の動機が又惱しく思ひなされた。

『この事が、私の望みどほりに行つてゐたら、私貴方や美代子さんに逢ふのが、どんなに心嬉しかつたかも知れやしませんわ。』

『そこが貴女と美代子さんの違ふところです。自分の弱點を摑まれるのは、あの人には何より苦痛なのです。』

『私があの人の弱點を突くくらゐなら何も心配することなかつたのですもの。』

『貴女が人の弱點を突くやうな人でないことは、美代子さんも知つてゐますが、それだけ尚厭だつたのでせう。それに又、大槻へ行くと云ふことが、貴女の想像してゐられたほど、厭でもなかつたのでせう。』

『然うでせうか。』

藤野は肝腎の言ひたいことも言はないで、いつ迄もそんな話に耽つてゐたが、するうち氣分がこぢれて來て、持出す氣もしなくなつた。大分たつてから、

『では私これでお別れに致しますわ。』

『然うですか。では當分お目にかゝりませんから。』

『貴方も御機嫌よう。』

『有難う。』

『東京へお歸りになるんだと思ふと、私何んだか妙な氣がしますわ。』

『それも當分の御辛抱です。河北君も、貴女を幸福にすることについては、十分考へてゐるやうですから。』

『何ですか……あの人も苛々してゐますから、靜かに自分の利害なぞは、考へちやゐられないやうでございます。』

藤野は物足りない思ひで、早瀬に暇を告げたが、後髪を引かれるやうで、足が連に重かつた。これで眞實に早瀬とも母とも緣が切れて了つたやうに思へた。

新事件の發生

（一）

處で早瀬と藤野夫婦との關係もそれ限で濟めば何の事ももなかつたのであつたが、事實は然うでなかつた。――新しい事件が彼等の間に續發したからである。其の事件も、早瀬が彼等と別れる時、大低相像してゐたとではなつたが、然し先の事が分明早瀬に判る筈もなかつた。たとへば河北は事業の失敗から多分生活の破綻を來すであらうと思はれたが、或は巧く遣るかも知れないと云ふ氣もしてゐたのであつたが、實際はさう巧くは行かなかつたのみならず、結果は可也悲慘なことになつた。

それは其翌年の五月頃のことであつた。早瀬はその頃眞面目な會社勤めも厭になつて、何かしら金に憬れをもつやうな心持になつてゐた。で時々株などに手を出して、思ひのほか調子よく浮ぶこともあつたし、見込がはづれて酷く創を負ふこともあつた。彼はそんなことに其日々々の氣分を紛らせて日を送つてゐた。宿も神田の力に引移つてゐた。と謂つても、彼は從來の會社を罷めて了つた譯でもなかつた。

すると或日の朝、附箋された見馴れぬ手蹟の封書が一通、彼の目を驚かした。彼は前晩に夜を更したので、其朝八時頃に床を離れて、寢衣のまゝ階下へ下り

て行つたのであつたが、茶の間の餉臺のうへに、外の手紙や新聞と一緒におかれた其手紙を見ると、急に睡眠不足のだらけた顔の筋肉が緊張して來た。

宿には娘の咲子と女中きりしかゐなかつた。母が外出してゐたからである。そして咲子はいつに變らず、めかし込んで長火鉢の側で繪入小説を讀んでゐた。

早瀬は昨年の暮に、こゝへ移つたばかりであつたが、小ぢんまりした暮しをしてゐる家の居心が好かつたのみならず、宿の人たちにも好かれてゐた。宿の人たちと言つても、五十二三の寡婦と咲子といふ二十か二十一、事によると二か三と思はれる娘に、女中だけで、閑寂した堅氣らしい暮しではあつたが、又然うでないやうな處も見えた。

最初はきちんとした仕切が二階に間借をしてゐる早瀬と、彼等母子との間にあつたのであつたが、この春になつてから、早瀬がお菓子やお鰭を奢つたり、三人で近所の寄席へ行つたりするほどになつてから、飯も下で喰べることになつた。

母親は始終苦い顏をした、顏の蒼い痩せた女で、何處々々までも早瀬と咲子との間を嚴重にさせておかなければ承知しないと言つた風を見せてゐたのみならず、自分の舊の產れや身分が好いとか。娘がお上品に躾けてあるといふやうな事を、內々はひどく鼻にかけてゐるらしい樣子さへあつた。しかし彼女が、早瀬を好いてゐたことは事實であつた。

早瀬もこの母子に對して、平氣ではゐられなかつた。といふのは、この寡婦の樣子から推すと、それが何だか藤野の實の母親ではないかと云ふ氣がしたからである。で、彼は好奇心から、彼等に親しんで其閱歷を探らうとする氣があつたのであつたが、また、若し然うだとすると、自分は飛んでもない處へ入つて來たものだと思うやうなこともあつた。

咲子の母親の寡婦は無口であつた。そして自分の身のうへなどをべちや〳〵語ることを、餘り好まぬといふ風であつた。たゞ抽象的に偶にちよつと其を仄かす

くらひであつた。で、早瀬もてつきり藤野の母に違ひないと決めて了ふこともあつたが、全然違つてゐると思はせることもあつた。

その上に、咲子が眞にこの寡婦の腹から出た娘か、それとも貰ひ子かと云ふことも、彼には判明した判斷がつきかねた。彼等母子の間には可也正しい禮儀があつたが、咲子に暗い氣分の附絡つてゐることも事實であつた。

（二）

それは左に右として、早瀬の今手に取上げた手紙には、封書の宛名書に前の本郷の下宿の所や名が書いてあつた、裏にはたゞ相州小田原にて河北としてあるきりであつたが、其が女の手であることは爭へなかつた。

『何だ！』と、何は不平さうに又不安さうに、封を切つたが、中には卷紙に二三十行の文字が書かれて、終りに藤野分とあつた。宿名も記されてあつた。一別以來の長い辭儀などがあつたが、手紙の文意は恁うである——私は今こんな所へ來てゐます、貴方とお別れして二月目の十月の末に、急に健康を損ねて、あの田舍の町で此春まで療治をしてゐましたが、思ふやうにいかないので、二月の末に一人で此方へやつて來ました。此方へ來る折に東京の土は踏みましたが、それも二日ばかり旅館にゐたきりでした。體はこの頃少し好い方へ向いて來たやうですが、毎日々々寂しい波の音ばかり聞いて暮してゐますので、孤獨と寂寥の感は一層深うございます。貴方もお變りもないことと存じます。牛込の母や結婚後の美代子は幸福で暮してゐるでせうか、毎日思出さない日とてはございません。私は全く死んだやうな氣持でございます。それでも未練がましく生きて行かなければならないのが自分ながら淺ましいくらゐでございます。不運な藤野より——

早瀬は讀了ると、驚きと悲しみに急に胸が苦しくなつた。で、それを元氣なく捲き收めて、懷へ捻込むと、平氣らしく他の事務上の手紙を開封した。しかし幾度繰返しても、文意が判らなかつた。藤野のことに氣を取られた彼の目に、文字

などの見えやうはなかつた。

彼は楊枝を啣へて、其まゝ洗面場へ出て行つた、そして半ば無意識に顔を洗ふと、いつもお愛想の一つも言ふことになつてゐる咲子には辭もかけず、急いで二階へ上つて行つた。そして再び藤野の手紙を讀みはじめた。

『てつきり肋膜の再發か肺病だ！』早瀬は然う思つて、胸が板のやうに痛く硬張るのを感じた。

『河北の仕事だつて、面白く行きやうがないんだ。』早瀬はさう思つた。

孰にしても放拋つてはおけないやうな氣がしたので、彼は慌忙しく返辭を書かうとして、萬年筆を取りあげた。併し書かうとしても、書くことが容易に纏らなかつた。訊きたいことが餘り澤山あり過ぎた。

『いつそ行つて來やう。』早瀬は急に藤野に逢ひたい樣な氣がした。何かしら、藤野が彼の救ひにくるのを待つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

立つにしても、會社の方の用事も片着けておかなければならないので、左に右今夜か翌日のことにしやうと思つて、彼は何時ものとほり、鏡に向つて髪の手入をしてから、外出の仕度に取りかゝつた。

『今日は朝飯は抜です。』彼は下へおりると、さう言つて茶の間の入口へ顔を出した。飯臺の上には、ちやんと其仕度がしてあつた。

『あら何うして？』咲子は顔をあげて訊いた。

咲子は一二度水を潜つたネルの單衣物を着てゐたが、其柄も派手なので、酷く若く見えた。暮に十九だと言つてゐたが、或は眞實かも知れないと思ふくらいであつた。眉との間が少し迫り過ぎた切の長い目に表情の多い顏だが、張切つた皮膚をメスで割いたやうな唇が、雜種のやうな感じを與へる。其上ちよつと口を利くにも、顏が紅くなる方であつた。で、彼女は今も返辭に困つて、幾帳的に自分を凝視めてゐる早瀬と目が合ふと、顏に美しい血が入染むやうに紅くなつた。

早瀬は冷笑ともお愛想ともつかぬ妙な微笑を目に浮べたが、そのまゝ帽子を冠つて、玄關を出た。

彼はこの頃咳子をひどく可愛く思ふやうになつてゐたが、又厭でたまらないやらなこともあつた。

（三）

早瀬は午前中會社に働いてから外で飯を食つて、もう其が四時頃であつた。

彼は過去の罪過について、一ト頃のやうな痛切な感じも失せて、藤野に對する苦しい責任感も薄らいだのであつた。例へば咳子などが何時とはなし彼の心を支配してゐるのも、其のためであつたが、一たび藤野や美代子のことを思ひ出すと古痍がまたづき〳〵痛みだして來るのであつた。

これ迄にも、彼は今の宿を出やうと思つたことが幾度だか知れなかつたが、咳子母子の身の上を知りたいと云ふ不思議な好奇心が、彼を引止めた。そして恐怖を抱きながら、彼等母子に接近しやうとした。それに咳子を心から愛する氣には

なれなかつたが、咳子の自分に對する氣持が段々解つて來るやうな氣がして來た。

今日も彼は藤野の手紙から、手酷い刺戟を受けずにはゐられなかつた。過去の印象が又新しく盛返されて來た。そして用事をすますと、其日はそれで宿へ還るつもりであつたが、藤野の泣濡れた目が目に見えるやうで、一刻も猶豫ができないやうな氣がした。すると又そんな祕密を少しも知らない咳子の熱情的な目が不思議な力をもつて彼を凝視めてゐるやうに思はれた。

早瀬の足は然し何時となし東京驛の方へ嚮いてゐた。そして二十分ばかりすると、彼の背廣姿が西行の列車の一つに見出された。彼はクションに腰かけて、長い脚を折重ねながら、今停車場で買つて來た新聞の相場欄に氣を紛らしてゐたが

頭惱は暗い雲に封されてゐた。

小田原へ着いたのは七時頃であつたが、海岸の方にある藤野の旅館を訪ねた頃には、日影も大分薄らいで、海の彼方に見える島山の姿が夕濛靄に立罩められてゐた。

藤野は、海邊の松原に臨んだ旅館の寂しい下の一室にゐたが、夕飯がすんだばかりのところで、緣側の籐椅子に腰かけて、暮れて行く海を眺めてゐた。薄暗い電燈が彼女の後影を照してゐた。

女中に案內されて廊下ずたひにやつて來る、早瀨の姿がふと振歸つた彼女の目に映つた。藤野は急いで椅子を離れて、彼を迎へたが、口を利くことすら出來ないほど、懷しさと哀しさに胸が塞がつてゐた。

『暫くでした。』早瀨も重苦しい氣持を、強ひて押退けるやうにして言つた。

『眞實に暫くでございますね。』

藤野はネルの上に袷羽織を襲ねてゐたが、灯影の下に坐つた顏を一寸見たところでは、何のこともなささうに思へたが、よく視ると衰弱が目にたつた。頰も骨張つて來たし、表情もひどく陰鬱になつてゐた。

『お手紙を有難う。』

『では私の手紙をごらん下すつたんでせうか。』

『え。……』

『それでわざ〳〵お出下すつたんですか。私突然あんな手紙など差上て、失禮だと思ひましたけれども、偶然そんな氣になつて……』

『貴女にこんな處でお目に掛らうとは、夢にも思ひませんでした。』

『は……私も……もう長いこと此處にゐるのでございますけれど今迄は我慢してをりましたの。』

『で、御病氣は？』

藤野は其の病氣のことだけについても、語ることが山程あつて、ちよいと手輕に答へることも出來ないほど氣持が複雜してゐた。

二人は暫く深い沈默に陷ちた。

（四）

早瀨は藤野の沈默によつて、病氣が餘り樂觀すべき狀態ではないのだと云ふことを暗示されたと共に生活事情も可也切迫してゐることを想像しないでは居られなかつた。

『河北君のお仕事は其後如何な樣子ですか。』早瀨は又訊いた。

『あれも餘り思はしくはございませんので、』と、藤野は憶出すのも厭だと云ふ風で、『私も河北は迚も事業家ぢやないと思つてゐましたが、まさかあれ程とも思ひませんでした。仕事か見込どほり行かないと云ふよりか、生活が滅茶々々なんでございます。』

『どんな風ですか。』

『それはお話もできないくらゐ酷いんですの。』藤野はいくらか熱が發したとみえて、顏に生彩が出て來て、『あの人の仕事が測量や何かの間違ひから悉的滅茶滅茶になつたのは、あれから間もないことでしたが、注込んだお金もそれ限で、其上浪費も多かつたものですから、今では其後始末もできなくて、隨分苦境に陷つて了つたらしいんでございます。其れもあの人が、合同の期を失して了つたからなんだつて、仲間からの非難を受けて、責任も問はれると云ふ有樣ですが、其と同時に河北の信用が悉皆亡なりましたから、今度は自身の負債の方が責められると云ふ風に、もう迚も救濟の道もつかないだらうと存じます。其に何より困りますのは、あの人の生活が大變荒んで來たことでございます。そこへもつて來て、私がこんな病氣を出して了ひましたものですから……』藤野は時々息切れでもするやうな弱々しい調子で話したが、顏を見ると直ぐそんな話を持出したこと

が何となく氣がひけて其のまゝ俛いて了つた。

『そんな心配があつちや、貴女も病氣に障るでせう。』

『それあ然う思ひますけれど……』

『河北君は偶に此方へやつて來ますか。』早瀨

『その積だつたんでせうけれど、そんな事で其も自由を失つて了つたのでございます。』

『そんな事なら、もつと早く知して下されば可かつたぢやありませんか。』早瀨は感傷的な調子で言つた。『そんなに長く、貴女は孤獨の生活に能く堪へられたですね。』

『實は餘り苦しいものですから、もう餘程前から、手紙を差上げませう差上ませうと思ひながら、こんな事で御心配かけるのも殘念だと思ひまして……』藤野は聲を曇ませて、『私この頃は毎日東京の方を眺めて泣いてをりました。母や美代子のことも憶出さない日はございません。この四五日は殊に何だか心元なくなつて、迚も我慢がしきれなくなつたものですから、唐突に手紙など差上げまして……』

大分たつてから、早瀨は『それで病氣は？』

『この頃はいくらか宜しいんでございますけれど、先々月以來河北から送つてくれますものも、途絶えがちの有樣で、恁うしてゐても何だか心配でたまりませんの。』

早瀨は想像以上にも、彼女の苦しんでゐるのに、胸を突かれて、語さへ出なかつた。あれほど忍耐性に富んだ藤野が、それを訴へずにはゐられない氣持を、考へずにはゐられなかつた。

『その位のことなら、お手紙さへ戴けば何うにかなつたのです。何うかするのが私の義務です。』

『私河北がそれを好まないだらうと存じますけれど、彼方でも田舎の不動産——それも河北の弟や妹たちの有になるべき筈のものを、河北が父に秘密で抵當に入れてあつたのが、此の頃それが露見したとかで、それだけは義理の母へ對しても、何うしても返したいとか云つて、今それで頭腦を惱ましてゐるらしいのですから、迚も私まで手の廻る氣遣はございません。』

（五）

で、其等の紛紜つた事情が、何の誇張もなしに靜に語られたが、其うち藤野は疲勞を感じて、口を利くのも苦しげであつた。

彼女は去年の秋流産後肋膜が再發した。そして其から肺を惡くして、吐血した ことすらあつた。田舍のじめ〳〵した空氣と荒い風がひどく衰弱した體に響いたのである。河北は苦しい中から金を工面してこの海岸へ送つてよこしたは寄越したけれど、今の彼の狀態では、仕送りを繼續することすら困難であつた。

それ處か、藤野は差當つて一萬ばかりの金が、河北の手に入らないと、辛うじて殘つた田舍の不動産の大部を、失はなければならない事情を、河北の手紙で略推察してゐた。長い間彼女は寂しい遣せない海邊の生活を耐忍んで來たうへに、この三月ばかり、物資の不安に脅かされながら、河北のそんな苦しい事情をも考へないではゐられなかつた。それに河北の心持を言ふと、彼は藤野に對しては、いくらか棄鉢の氣分になつてゐた。それも藤野に解つてゐた。

藤野は思ひ餘つて、早瀨に送るべく幾度手紙を書いたか知れなかつた。此際彼を力と賴むのは我ながら腑效ないことのやうに思はれるけれど、外に話をしやうと思ふ人もなかつた。

話が容易に盡きなかつた。藤野の體が、思つてゐるだけを殘らず話すことを許さなかつたけれど、ぽつ〳〵話してゐる僅かの辭のうちに多くの意味が語られたのであつた。

『お話の模様では、一萬圓の金があれば、差當り河北君も多少寛ぎができてくる譯ですね。』早瀬は大分たつてから言つた。

夜がもう可也更けてゐた。浪の音も高かつた。

『それあ然うですけれど、そんな大金は迚も及びもないことです。』

『無論私の力では出來ませんけれど、この事情を阿母さんにお話したら、或は何うにかして下されやしないかと思ふのです。』早瀬は首を傾げたが彼にも自信はなさそうであつた。

『迚も駄目だらうと思ひますけれど……』藤野も首を傾げたが、以前のやうに其れを拒むことは避けた。『それよりか、私貴方にお願したいのは、私の現在について、母にお話して戴けないかと思ひまして……』

『其事なら、私が何うにかします。で、今どの位の金が必要ですか。』

藤野は躊躇した。彼此二百圓ばかりの金の缺乏に、彼女は心を惱ましてゐるのであつたが、その全部を早瀬に心配してもらふことは、何となく氣が咎めた。

『どうぞ御遠慮なく言つて下さい、三百圓もあれば可いんですか。』

『そんなでもございませんの。』

『では、今日は澤山持合せがありませんけれど、百二三十圓ありますから、これだけ置いて行きませう。私は三四日したら、また遣つて來ます。』

『私貴方からお金を頂く積りはなかつたのですけれど……』

『けれど私自身の心持として、傍觀してゐる譯には行きません。それだけのことは爲せて頂きたいのです。』

早瀬はさう云つて、隱しから革の紙幣入を取出して、札を幾枚か抽出すと、それを私と火鉢の蔭に置いた。

實は藤野は百の慰めの辭よりか今の場合必要に迫られてゐるのは金であつた。其金がなければ、生きる道さへないのであつた。藤野は心から感謝せずにはゐら

れなかつた。涙が自然に零れた。

『では御遠慮なし、私戴いておきますわ。ほんとに宜しいんでせうか。』

交叉點

(一)

早瀬は其後も幾度となく小田原に藤野の病氣を見舞つた。そして或時などは殆んど一夜を話し明した。藤野が小田原にも飽いた樣子なので、早瀬は茅ケ崎か平塚あたりへ彼女を移さうと思つたが、彼も近頃は懷が餘り暖かでなかつたし、藤野も氣兼をするので其儘になつた。

所で、そんな事が唉子の目に着かない譯に行かなかつた。世間的な細かいことには餘り氣のつかない唉子よりも、先母親の目に留まらないではゐなかつた。

『早瀬さんは此頃どこぞに女ができたやうだなんて、阿母さんが然う申してをりました。』唉子は左の頰に、笑靨を渦まかせながら言つた。

彼は愈々手詰りになつて來た時に、自分の部屋から冬の衣類を持出したりした。暑くなつて、夏洋服や單衣物を新調するでもなかつた。投機に手を出すやうな氣分になつてから、彼は服裝や持物杯に頭腦を使つて、めつきり洒落者になつたのであつたが、近頃はそんなことに氣を配る餘裕もなかつた。

『己はそれ處ぢやない、此頃はひどい不景氣で、下宿料が拂へるか何うかと思つてゐるくらゐだ。』早瀬は笑つてゐたが、底に暗い影が流れてゐた。

『可ございますわ。宅の下宿料なぞ何でもございません。』唉子は大樣に受けて『若しお金がお入用でしたら、貴方のことでございますもの、幾許でもお立替致しますわ。』

早瀬は慄然とした。雷に其のみづ〳〵した愛嬌のこぼれさうな目の表情に慄然としたばかりでなく、唉子の母が內々で高利の金を廻しなどしてゐる樣子のあ

るのを思ひ出したからであつた。

『では少し貸してもらひませうかね。』早瀬は恍けた調子で言つた。

『え、よございますとも。千圓もあれば宜しいんでございませうか。』

『千圓？　さうですね、僕の今慾しいと思つてゐるのは、もつと大な金なので……』早瀬は苦笑した。

『では何のくらゐ……』咲子は目を圓くした。

『一萬圓もあると、ちよつと僕の男が立つんだがね。』

『ですけれど、其の使途を伺はなくちや。やつぱり藝者なんでございますか。』

『そんな暢氣なんぢやない。だが、それは一寸言へない。』

『やつぱり小田原でございますか。』咲子は揶揄ふやうに訊いた。

『小田原は小田原だが、それも僕が以前恩になつた人で……』

『そのお方が今は落目になつてゐらつしやると言ふのでございませう。』

『まあ然う云ふ譯です。其人の良人を救ひたいのです。そして其は其の大きな方の口だが、その細君が病氣で、長いこと小田原に來てゐて、ひどく金に困つてゐる所から、僕が時々行つて見てやると云ふことになつたのです。』

『あゝ然うですか。』と、咲子は顔を眞紅にして俛いたが、少し間をおいてから

『その奥さまと貴方とは、何う云ふ御關係なんでございますか。』

『それは一寸言へません。』

『お若い方なんでございますか。』

『さう、二十三くらゐでせう。』

『では肺でもお惡いのでございませうか。お氣の毒でございますね。』咲子はまた顔を紅くした。

二人はその時茶の室にゐた、無口な母も側にゐて聞いてゐたが、早瀬は酒に醉つて歸つて來たばかりで、そんな話をしてゐるうちに、其女が自分の許嫁であつ

たことまで口走つてしまつた、其上此次小田原を訪問するをりには、咲子を同伴すると云ふことまで、約束してしまつた。

（二）

翌朝になると、早瀬は自分の秘密を咲子母子の前に告白したことを後悔したが然し又咲子が甚く其れに感動された風のあつたのは、彼の感激でもあつた。で、咲子が是非その氣の毒な、彼の以前の許嫁の女を、一緒に見舞ひたいと云ふので、早瀬は他に何か目的があるのではないかと多少不安に思つたが、其の希望が熱心なので、或日の午前、見舞の滋養食料などを二人で買つて、汽車に乘込んだ。

『よく阿母さんが許しましたね。』早瀬は汽車の中で咲子に話した。

咲子はお上品ぶつた扮裝をして輕い草履をはいた姿の好い足をきちやんと揃へ學校を出たての處女のやうに取澄してゐたが、早瀬と一緒に汽車に乘つたことが、何となく嬉しさうであつた。

『母は貴方を信用してゐますの。』と、につと笑つて、其に貴方の許嫁の方のお見舞ですもの。』

汽車がもう戸塚あたりまで出てゐた。

『貴方は其方を、今でも愛していらつしやるの。』大分たつてから、今度は咲子が訊いた。

『まあ、可哀さうだとは思つてますね。一つは許嫁時代には割合に其女のことを眞面目に考へてやらなかつたせいかも知れない。』

『ぢや、人のものになつてから、其方の爲に其を後悔してゐらつしやるのだわ。』

『いや、それとも又違ふ。まあ、何といつて可いか……これは僕の性癖とでも言ふのだらう、唯何となし責任を感ずるので。』早瀬は苦しい説明をした。

『それで其の一萬圓は、貴方の心持として、何うしても拵へてあげなければなら

ないんですの。』

『それが出來れば、僕の重荷も少しはおりるだらうと思つてゐる。あの女に不幸な結婚をさせたのは僕の罪だからね。』

『でも、一萬といふお金はなか〳〵大金だわ。』咲子は思慮深い目色をした。

『少くも今の僕の收入としてはね僕が金を儲けなければならないと感じたのはね一つはあの夫婦を救はなければならない責任があると云ふ感じがしてゐたからさそれに其女は、僕と結婚さへしてゐたら、相當の財産も貰へたんだからね。』

『さう！』と咲子は頷いたが、

『ぢや隨分運のわるい方ですわね。私にだつて、そんな經驗がございますのよ。』

『えッ、咲子さんにも。』早瀨は女の顏を眺めた。

『ぢや許嫁の人があつたの。』

咲子はまた紅くなつた。

『許嫁つて云ふんぢやないんですわ。でも夫婦約束はしましたの。』

『どなん人さ。』早瀨は好奇の念に動かされて訊いた。

『さうね。』と、咲子は首を傾けたが、

『其人は大した財産家なんですのよ。若し私がその人の奥樣になりさへしたら、一萬圓ぐらゐ貴方に上げても何でもなかつたでせうよ。』

早瀨は笑つた。

『今ぢや駄目？』

『今だつて出來ない相談でもなささうだわ。私が其の人に、何うしても其れだけのお金を拵へて下さいと言へばね。』

『はゝ。』と、早瀨は笑つて、『咲子さんは凄い腕をもつてゐる譯だね。』

『さう？』と、咲子は早瀨を見返した。

二人が國府津へおりたのは、一時少し前であつたので、其近所で晝飯を食べるた

めに、早瀬は咲子に訊ねた。

『國府津館は可けない？　そして彼處で電話をかけてみて、あの女が咲子さんに逢ふと言つたら行かう。』

『それが可いわ。』

（三）

少時すると、二人は眞晝の日光のきら〳〵する、六月の海を目の下に眺めながら、三階の一室で晝食を取つてゐた。

咲子はこんな處へ來てもお品よくは構へてゐたが、ちよい〳〵來てゐるとみえて、怯けた樣子もなかつた。箱根や熱海は何の家が好いなぞと云ふことも略知つてゐるやうであつた。

『誰と來たのですか。』早瀬は訊いた。

『私が結婚することになつてゐた人に連れられて來ましたの。』咲子は發作的に顏を紅くした。其れでなくてさへ、彼女は一杯飲んだ麥酒に醉つてゐた。

『一萬圓の金を出させると云ふ其人ですか。』

咲子は口元に渦をまかせて、につと笑つた。

『ぢや、今でも關係があるんですか。』

『人が間へ入つて、手が切れたことにはなつてをりますの。ですけれど、私其人を呼出さうと思へば、今でも呼出せますわ。それあ眞實に好い人なの。私の言ふことなら何でも肯いてくれますわ。』咲子は顏も紅くしないで平氣で言つた。

『それぢや關係はまだ續いてゐるのだね。』

『でも私の方で、眞實に切れて上げやうと思へば何時でも切れますわ。續けてゐやうと思へば何時までゞも續けてゐられますわ。』

『最近に逢つたのは、何時頃ですか。』

『貴方が私の家へいらしてからも、一度來ましたわ。臆病な人ですから、人に逢

ふのを大變厭がりますけれど、私が御紹介すれば何時でも悦んで逢ふでせうよ。そして、少し仲がよくなつた處で、お金をお貸しなさいと云へば、あの人は幾許でも出しますわ。』

『僕にですか。』

『私の懇意の方だから、貸しておあげなさいと私が一言言へば急度出してよ。』

『一萬圓を！』

『え、その位は……』

『一體何をしてゐる人です。』

『何もしないの。ぶら〳〵遊んでゐますの。』

『何といふ人です。』

『お名前は申されませんわ。』咲子は又顔を紅くした。

『身分のある人だからですか。』

『いゝえ。』と、咲子は首をふつて、

『たゞお金があるだけなんですけれど……お名前は御紹介する時に申しますわ。』

少し經つてから、早瀬は藤野の處へ電話をかけに降りて行つたが可成手間がとれた。

『こんな悒鬱しいところへ來られては困ると言つてゐましたけれど咲子さんの心持をよく話したら、それではお日にかゝると云つてゐました。貴女は眞實に逢ふ積ですか。』早瀬は部屋へ歸つてくると、然ういつて咲子に念を推した。

『え、どうぞ。』咲子は應へた。

二人は旅館の前で電車に乘つた。そして一時間ほどの後、小田原でおりたが、間もなく海岸寄の藤野の旅館へと着いた。

藤野は早瀬が初めて來たときに比べると、多少見直した方であつたが、皮膚の

色の美しい、肉附のふつくらした咲子とは、比べものにもならない程憔悴してゐた。

早瀬に紹介されて、二人は名前を名のり合つた。

『さぞお困りでございませうね。』咲子は優しく慰めて、『私早瀬さんから伺つて急にお目にかゝりたくて爲方がございませんでしたの、でも此頃は少しは快い方でいらつしやいますか。』

『は、お蔭さまで……。』と、藤野は此女が如何な人だかと云ふことを、可成氣にしないやうにして、『初めての貴女に、御親切にお見舞なぞ頂いて、濟みませんね。』

（四）

咲子はしをらしげに羞かんだ風をして、『いゝえ、私貴女のやうな方のことを伺ふと、眞實に同情致しますの。其に早瀬さんとは、至つてお心易くしてをるものですから、貴女のことを伺つて、何ですか他人の樣な氣がしませんでしたの。』

『貴女は御兄弟がゐらつしやるんですか。』藤野は自分の心持から言ふと、一寸調子はづれにも思はれる此女の同情振に、一種の嫌惡と心苦しさとを感じながら何となし可憐しいやうな氣がして、さう云つて訊ねた。

『ございませんのよ。』咲子は彼女の顏のうちで一番の瑕だと思はれる惡い齒並の口を、不用意にぽかんと開いたが。『ですから私寂しくて爲方がございませんの、貴方のやうな姉が一人あつたら、如何に好いか知れやしませんわ。』

『大變ですわ。私のやうな病人。』藤野は苦笑した。

『結構ですわ。』咲子は紅い顏をして、『私肺病なぞ私些とも可怕いとは思ひませんの。肺病の方が何だか可羨しいやうな氣がして、自分にも成つてみたいと思ふことがございますの。』

『それでね。』と、早瀬は傍から咲子の話を遮るやうに、『河北君からお消息があ

りましたか。』

『は、四五日前に一寸……』と、藤野は急に氣をかへて、暗い目色をした。

『どんな風でした。』

『近いうち外國へ行くかも知れないなんて言つてよこしましたけれど、多分行窮つた結果だらうと存じますの。それに若し早瀬さんに今でもあの頃の好意があるなら、私と母との和解の道を講じてみたら、如何だなんて言つて來ましたの。自分を當にしてくれるなと云ふ意味ですの。』

『貴女は貴女の計畫を立てろと云ふ意味ですね。』

『は。』藤野は悲しげに答へた。

『僕から金錢上の助けを得たことを、言つてやつたんぢやないですか。』

『いゝえ。でも大概想像したかも知れませんわ。』

早瀬は默つて了つた。

『何だかひどく銷沈してゐるらしいんでございますの。事によると、父の私印を盜用したことが、何か面倒な問題になつてゐるんぢやないでせうか。父も河北の遣方にはひどく腹を立てゝゐるやうでございますから。』

『まさか。』と、早瀬は首を掉つたがしかし受取れないことでもないと云ふ氣がした。

『しかし然うまでならないとしても、今の河北君には何うしても纏つた金が必要なんです。義理の弟妹たちの大切な財產をふいにした譯ですからな。』

『わたし其を考へると、眞實に辛うございますの。若し出來ることなら如何なことをしてもいゝと思ひますわ。私の體なんか如何なつても介意はないと思ひます。』藤野は興奮した語調で言つて、涙ぐんだ。

『さあ其金ですがね。』と、早瀬も溜息をついた。

『眞實にお困りでございませうね。』咲子がその時またしみ〴〵した調子で言つ

た。

『咲子さん何うかしないか。』　早瀬は笑談らしく言つた。

『え、ですから私さう言つてゐますわ。貴方があの人に逢つてさへ下されば。』

咲子は事もなげに應へた。

『いや、笑談だよ。』　早瀬は笑ひに紛らせて、『いくら慈善心に富んだ人だつて、一面の識もないものに一萬といふ大金を出す好奇があつて堪るものか。』

『でも其はそんなに難しいことぢやございませんの。私を信用して下さらなくちや駄目ですわ。』

『信用しないわけぢやないが、筋道の立たない金の出來やう筈がない。』

咲子は其の上爭はうともしなかつた。

（五）

咲子の相手をして、餘り藤野が疲れても悪いと思つたので、早瀬はまだ居たいやうな咲子を促してそこを出た。

で、まださう日が傾いてもゐなかつたので、二人は家への土産を買ふつもりで町をぶら〳〵歩いてゐた。すると『すんりう。』と云ふ。小田原名物を賣る大きな店先で、一人の若い肥つた男を載せた一臺の自動車がバンクして困つてゐるのに出逢つた。

今買物に入らうてした咲子は、ふとバナヤを前踏りに冠つた其の乘客の顔を見ると。早瀬を棄ておいて、つか〳〵と側へ寄つて行つた、其と同時に上から彼女を見着けた彼も、『や、誰かと思つたら咲子さんか。』とにや〳〵笑ひかけた。

咲子は顔を眞紅にしてゐたが、『どうも暫くでございました。』と、低聲でお辭儀を言つた。

『不思議な所で會つたね。何處へ行つたんだい。』

『あの方とちよツと病氣見舞にまゐりまして、今歸る所なんでございますの。』

『あれは誰？』男は微聲で訊いた。

『此頃宅にいらつしやる方なんでございますの。』と、咲子は一寸後を振顧つたが、早瀬は知らない振をして、彼方向になつて何か買物の方に氣を取られてゐた。

『私貴方にお目にかゝりたくて爲方がございませんでしたの。夫に色々お話もございますの。貴方何方へ入つしやいますの。』咲子は懷しげな調子で乘客に訊いた。

『僕は熱海へ行くんだ。友人が待つてゐるんだ。何うだね、連の人に惡けれあ爲方がないが、何なら一緒に行つてみないか。』

『私ほんとうに行きたうございますわ。行つても宜しいのですか。あの方を御紹介しませうか。』

『然うね。しかし如何な人だか。』

『△△物産へお勤めなさる、法學士の方なんでございますの。』

男はちよいと怯けたやうな風をしたが『うん〳〵。』と輕く頷いて、

『まあ逢ふのは止さう。』

咲子は急いで早瀬の傍へ寄つて行つた。

『まあ、私不思議なところで、あの方にお目にかゝりました。先刻も貴方にお話しました……丁度好うございましたわ。』

『あゝ然う。』早瀬はちらと彼を見た。

『私貴方を御紹介しやうと思ひましたけれど、極を惡がりますから、それはお止めにしましたけれど……』と、咲子は深い目色をして、

『私あの方と、ちよつと熱海まで參つても可うございませうか。』

『それは貴方が自由だが、大丈夫か知ら。』

『え、それではもう……それにあの方となら、母も安心しますから。』

『ぢや、爰で別れますか。』

『貴方には濟みませんね。復の折にしても宜しいんでございますわ。』と、咲子は目の表情が面白いほどぐる〳〵變化して行つたが、紅い顏をして、『でも、あの方とは表面切れたことになつてをりますから、こんな時でゞもなければ、私滅多にお目にかゝることができませんの。それに今のお話をするには、丁度お誂ひ向の機會だと思ひますの。』

『そんなことは別段當にもしないけれど……左に右僕にかまはずに。』

『どうも濟みませんわね。それでは御免なさい。私急度今夜歸りますわ。でなければ翌朝……』

『いゝとも。僕がよく言つておかう。』

『どうぞお願ひします。』

代りの自動車が、大急ぎでやつて來たところで、咲子と其男とは急いで其に乘つた。そして臭い匂を迸らせながら、砂煙を長く後を引いて走つた行つた。

『ちえッ、何のこつた！』早瀬は店のベンチに腰をおろして、馬鹿々々しさうに苦笑した。

少時すると彼は氣をかへて、再び藤野の處へ引返して行つた。咲子を彼女に紹介などしたことを窃に悔いてゐたからである。

無心

（一）

大槻周造と咲子と同乘した自動車は、ごちや〳〵した町を離れて間もなく湯本路を走つてゐた。

周造はその頃、人に唆かれさて、新に創立された、若くは出來さうとしてゐる詰らない事業に手を出してゐたが、今日も其等の連中と熱海で落合ふことになつてゐた。

『私貴方にお目にかゝりましたを幸ひに、少し折入つてお願ひしたいことがございますのよ、』 咲子はがた〳〵搖れる車體と共に、輭やかな軀を彼にもたせかゝるやうにして、ねば〳〵したやうな天性の調子で言つた。

『また金だらう。』 周造はさう思つたが、女がお品ぶつてゐるので、彼も紳士氣取で、『それは一つ先へついたら聽きませう。』

『それでも可しいのですけれど、私可成二人差向ひでお話がしたうございますの。』 咲子はやつぱり絡みつくやうな舌で、『それに折角かうしてお目にかゝつたのでございますから、出來ることなら、湯本か塔の澤でゆつくりしたうございますわ。』

『さうね、其も可いかも知れんよ。』 周造は大風に應へた。そして自動車を箱根へ上せることにしたのであつた。

『眞實に久振でございますね。』

『いつ逢つたらう。あれは確か二月ぢやないか。』 周造は言つた。

『それに我々はもう逢はないと云ふ約束だつたね。こんな處を齋藤辯護士にでも見着からうものなら其こそ大變だよ。』

『でも貴方は、それは表向で、秘密になら時々逢つても可いと仰やつたぢやございませんか。』

『そんな事も言つたかも知んれが然しまあお互に謹愼した方が可いぢやないか。』

『では他は一時の氣休めに仰つたのでございますか。』 咲子は目緣や耳朶まで紅くしながら言つた。

『そんな事はまあ何うでも可いぢやないか。』 周造は宥めるやうに言つた、『齋藤辯護士の說によるとね——惱つちやいかんよ……』

『齋藤さんが何とか言ひましたか、それは何うせね。』

『何でもあの男の說では、お前のお袋といふのが、迚も喰へない人間だといふの

でね。』

『隨分酷いこと！』咲子は執念深いやうな目色をして、『私あの方は大嫌ひでございます。私を藝妓かお妾の手を切るやうに、それは隨分輕蔑していらつしやるんでございますもの。私ほんとうに腹が立ちましたわ。』

『まあ可い。』

『それから何と言ひました』

『怒るから止さう。』

『私貴方に怒つてゐるのぢやございませんの。貴方はほんとうにお優しくて、親切でいらつしやるんでございますもの。私あの齋藤のやうな頭の冷たい人は嫌ひでございますわ。』

『處が齋藤に言はせると、お前はとにかく、お前の阿母さんと云ふ人が、少しも人情のない人だと言ふのだからね。それに可恐しい金取主義で、娘を囚にして……』周造は言はうとしたが、自動車が石に打つかつてひどく跳上ると同時に二人は一尺ほどもクションから飛上つた。そして其拍子に、厭と云ふ程こつきらこを遣つた。咲子は目から火が出たかと思ふくらゐ、周造の堅い額にぶつかつた。

『おゝ酷い！』咲子は手巾で目を抑へた。

『何うかしたの？』

『いゝえ。』咲子は痛みを悩へて笑つた。

『だが齋藤はさう不親切な男ぢやないよ。其にお前だつて、僕と結婚したら困るだらう。』

『其はどうせ身分が違ひますもの。』

自動車が次第に山がゝりの路へ差かゝつて行つた。水車が見えたり、水の滴る崖が現はれたりして、山氣を帶びた涼しい風が汗ばんだ肌を吹いた。

周造が咲子を連込んだのは、彼が新婚の時美代子と一緒に來て、三四日遊んであたと同じ川沿の旅館であつたが、季節が季節なので可也立込んでゐた。

『もう一年以上になるね。』周造は一ト風呂入つて汗を流してくると、往來の方へ向いた廊縁の籐椅子に凭れながら、崩れた髪容を直してゐた。咲子を振顧つた。咲子は鏡臺の前に坐つて

『どうも御馳走さまでございますね。』と、彼女は皮肉らしい舌弛い調子で應へたが、結婚といふことについて是迄餘り考へたこともないので、自分ばかりが其經驗をもたないのが、何だか心寂しいやうに思はれた。周造との愛も、結局はそこへ落着くらしく想像されたが、なぜか母がそれを好まないやうにも見えた。咲子は一生母に奉仕しなければならない運命をもつてゐるやうにも考へられた。『お金さへあれば、どんな人でもお婿さんに來てくれる。』母がさう言つてゐる處を見ると、容易に自分を餘所へ出してくれさうには見えなかつた。とゞの詰りが、

能なしのやぐさな養子でも來ることになるかも知れないと云ふ氣もした。

『私ほんとうに詰らないのよ。』彼女は鏡の前を離れると、さう云つて周造の傍へ寄つて行かうかとしたが急に怯けたやうな風で、餉臺の前へ來て坐つた。

『何がそんなに詰らない？』

『何ていふことなし、私この頃時々そんな氣がして爲方がございませんのよ。』

『今の男に戀でもしてゐるのぢやないか。』

『あの方も好い方でございますのよ。それは親切で溫順しくて……。』

『あの男と結婚する譯にいかないのか。』

『今のところそんな氣持もございませんのよ。それに然うなると、何だかお友達でないやうな氣がして、厭でございますわ。あの方も結婚なぞなさらないでせう。』

『僕にお願があるつて、一體何のお願ひだい。』

周造は椅子を離れて、傍へ寄つて來た。

『それも實はあの方のことなんでございますけれど……』と、咲子は惱しげに言淀んだが、『あの方ほんとうにお氣の毒なんでございますよ。』

『體でも惡いのか。』

『いゝえ、體の惡いのはあの方ぢやございませんの。あの方の許嫁だつた方が、他の人と結婚して、その旦那樣が薄情なんですつて。それに大變事業に失敗なすつて、肺病で小田原へ來ていらつしやる奥樣に、月々の仕送もできないばかりか御自身が大變にお困りなすつて、一萬圓ばかりのお金が、何うしてもお入用なんですつて。』

『一萬圓？』周造は呆れたやうな目色をして、『何の事業だが知れないが、一萬圓ばかりの尻が拭へないなんて、隨分意氣地のない話ぢやないか。』

『それあ然うですけれど……でも其方に取つては大金なんでございませうよ。』

『それで……？』

『あの方の以前の許嫁の方の旦那さまが、そんな風だものですから、其を何うしても救つてあげたいと云ふので、あの方が大變に心配していらつしやるですの。私感心しました。あの方の犧牲的精神に……。私今日あの方と一緒に其の奥さまのお見舞に行つてあげましたのよ。』

周造はよくも聽いてゐないらしかつたが、でも一ト通の心持は呑込めた。

『あの男は何をしてゐるんだね。』

『會社へ勤めていらつしやいますの。時々株なぞもお遣りになりますの。』

『それで其の金が出來なくつてお前に相談でもかけたと云ふ譯か。』

『いゝえ、たゞ私があの方の親切なお心持に同情して、出來ることなら其のお金を拵へてあげたいと思ひますの。』

（三）

『お前がかい。』周造は受取りにくいといふ顏色をして、『奇特なことだね。』

『お冷かしになつては厭でございますよ。』と、咲子はヒステルカルな凄い目をして、『私は眞實に眞面目なのでございますの。あの方の心意氣に全く感心してしまひましたの。私はそんな事が大好きなんでございます。』

『冷かしやしないよ。けど、一萬圓といへばお前に取つては大金ぢやないか。』

『だから私心配してゐますの。私の手で其だけのお金の出來やう筈がないんでございますもの。』

『あの男に對して、そんな義理がお前にあるのかね。』

『ですけども、お話を伺つてみれば、私だつてそんな氣になるぢやございませんか。そして此事は、貴方に同感して戴くより外ございませんの。』

『同感はするよ。』周造は頷いた。

『貴方は五十萬圓からの資產家でいらつしやるんでございます。お金が腐るほどお有りになるんでございます。』

『金と云つちや別にないが、財產はあるよ。しかし一萬圓と云ふ金を、不見不識の他人にくれる譯に行きやしないよ。お前は已に出させる意でゐるのかい。』

『ですけども、私があなたと結婚した場合のことをお考へ下さいましな。私は貴方の奥樣になる筈だつたのでございますからね。』

『うむ、む。』と、周造は沮げたやうな顏をした。

『それはお金ぢやございませんの、私は手切のお金がほしくて、貴方と切れて上げた譯ぢやございませんの。』

『知つてゐるよ。』

『それで母が、何うしても一萬何千圓と云ふものを頂かなければ承知ができないと申しましたのを齋藤さんが三千圓にお小切りになつたのでございます。』

『僕はそんな詳しいことは知らんよ、だがお前の阿母さんが金取主義だと云ふことは、僕にも解つたよ。申出の額が、可也不當なものであつたことも、爭はれな

い事實なんだからね。』

『それはさうでございますけれど女の貞操がお金で評價づけることの出來ないほど尊いものだと云ふことは、母よりか私の方が存じてをりますわ。』 咲子は强い目色で言つた。

『うむ。』 と、周造は口をもが〳〵させた。

『私は、自分の自由になるものならば……貴方と相對づくの話でしたら、お金など些とも頂かなくても可かつたかも知れませんわ、人が中に入れば、問題が自然お金のことに移つて行くのは爲方のないことでございますわ。それは眞實に形式だけのことでございますからね、自由はお互の心に許されてある筈でございますもの。』

『ぢやお前はまだ僕と切れないと云ふのかね。』

『でも、それは何にも知らない貴方の奥樣に濟まないことだと思ひますわ。ですけれど、お金だけで此の問題が解決されたと思はれるのは厭でございます。』

周造は何だかやゝこしくなつたと云ふ風で、

『で、今の一萬圓の話は何うなつたんだい。』

『ですから、私それを貴方にお願ひいたしますの。』

『僕に出せと云ふのかい。』

『私あの方を貴方に御紹介してこの事を貴方にお願ひしやうと思ひましたの。形式なぞ、それは何うでも宜いのでございます。』

『僕は厭だよ。あの男に逢ふ必要はないよ。』

『それは貴方の御隨意で可ございますの。私が親も家もない哀れな身の上だとして、私の生涯のことをお考へ下さいますなら、齋藤さんのやうな、殘酷なことを仰しやらないで、たとひ一萬が二萬でも、貴方が私に下さるのに不思議はないのでございますからね。』

（四）

そこへ麥酒や料理が運ばれたので、二人は飲食にかゝつたが、するうち日が西に落ちて、外はいつか夜の世界になつてゐた。周造はそれから熱海の方へ、咲子は自動車で國府津へ送られる筈であつた所を、夫から夫へと話が盡きないので、それも愚圖々々になつて了つた。それに腹がくちくなると、動くのが臆劫になつて、氣がついてみるといつの間にか十時近くになつてゐた。

『ね、宜しいんでございませう、私のお願したことは。』ごろりとそこに横はつてゐる周造の枕許に坐つて咲子は言つた、『それならば、私安心して此處に泊ることが出來るんですけれど……。』

周造は『うむ〳〵。』と、呻吟くやうな聲を立てゝゐたが、一萬圓といふ金は、彼としても然う容易く引受ける譯に行かなかつた。銀行から引出すとしても、一應齋藤辯護士の耳へ入れておかなければならなかつた。已むを得ずんば、彼を頑

是のない赤子のやうに思つてゐる祖母の私財のうちからでも胡魔化すのであつたが、彼も美代子と結婚以來、初めて純眞な處女の愛に接したやうに感じてゐたと同時に、是迄咲子母子の自分に對して爲てゐたことが、可也厭なものだと云ふことに氣がついてゐた。でも、彼は咲子を心から憎む氣にはなれなかつた。其上金を强請る彼女の不思議な動機にも心を動かされた。

『だが、事情がそんなに切迫してゐるのかい。』周造は暫くしてからぽつかり目を開いた。『金を渡すにしても、今直ぐといふ譯にも行かないぢやないか。それも其金が、お前の是非なくてはならないと云ふのなら、爲方がないが、單にあの男の心持に同情すると云ふだけでは、無意味ぢやないか。』

『でも、あの方は不運な其の許嫁の方に對して、傍のものが想像することもできない程、立派なお考へをもつていらつしやるのでございますもの。私も貴方にこんなお願をする積は、少しもございませんでしたの。どんな理由があるにしても、

私の心持と致しましては、母が齋藤さんから三千圓のお金を頂いたのすら、厭で厭で爲方がございませんでしたのよ。私は自分の心を、お金で左右されることが大嫌ひなんでございますわ。私此お金を頂けば此後貴方に一圓のお金も頂きやしませんわ。私だつて、母の財産を讓受ける時節が屹度來るだらうと思つてゐますけれど、それも決して欲しいとは思ひませんのよ。』

『まあ可いよ。』周造は苛々しげに言つた。『お前の潔白なことは知つてゐるよ。』

『でも、貴方が少しでも厭な氣持をもつていらしては。私は詰りませんのよ。私貴方と切れてあげたのも。眞實に貴方を愛してゐるからなんでございますわ、貴方が何にも知らない、心の美しい方だと思つたからですわ。眞實に貴方は好い方なんでございますもの。』咲子は我と我が言に感動されたやうに言つた。

『まあ可いよ〳〵。』周造は堪らなさうに遮ぎつた。そして、『ぢや、出來るか出來ないか……大概出來る積ぢやあるけれど……とにかく捗へることにしやう。面倒くさい理窟は言はないことにしてね。』

『それにあの方は、私を見くびつてゐますの。私が笑談を言つてゐると思つてゐるんでございますの。』

『しかし然う思つてゐるあの男がお前の好意を受けるか否かは疑問だね。』

『お受けにならなきやならないで可うございますの。私直接その奥さまにお渡しますわ。』

少時すると、女中が床を延べに來たので、その話もそれきりになつた。で、二人は一つ部屋に床を並べて枕に就いた。

後ろを流れる水の音が耳について、酒のさめかゝつた周造は、容易に眠られさうもなかつたが、後向になつてゐる咲子も、惱ましげにじつと胸を抱いて、涙ぐましいやうな氣持に引入れられてゐた。

（五）

翌朝八時頃に周造が目をさますと、唉子はもう朝湯から上つて來たと見えて、次の間で鏡臺に坐つてお化粧をしてゐた。そして周造の欠伸をする聲を聞きつけると、

『お目覺でございますか。』と、甘弛い聲をかけた。

周造はぽかんとした顏をして、枕の上に肱をついて莨を喫してゐたが、昨のやうに熱情的になつた彼女を、今迄見たことはなかつた。それは一萬圓の要求が充された歡喜の餘りだとも解釋されたが、結婚後の戀人に、不思議に放縱な情熱的愛が加はつて來たのだとも思はれた。そして其の二つは普通兩立しがたいものゝやうに思はれるのだが、彼女の場合では、それが何の不思議もなく一つになつて見えた。

『さあ今日は何うするかな。』周造は床から起上りながら言つた。

『貴方がもし熱海へ入つしやるやうでございましたら私東京へ歸りますわ。そしてお金のできた事を一刻も早くあの方に知らして上げたうございますの。』唉子は浴衣のうへに、薄い羽織をはをりながら、此方へ出て來た。

『まだ其事を忘れないのかい。』周造は笑談らしく言つて、『僕はまた金のことなんか何うでも可いんだらうと思つた。』

『然うすれば貴方は御都合がお宜しいでせうけれど、私が困りますわ。』

『何だか僕にはわからない。』周造は目に疑惑の色を浮べながら、楊枝を口に啣へた。

『何故でございますの。』

『僕が大事なのか、あの男が大事なのか、お前の氣が些とも判らないぢやないか。』

『それは私にも分明したことは判りませんの。眞實をいへば、私貴方の方が好きなのでございますけれど、あの方も大事なんですの。』

『で、僕は窘しめても、あの男を庇護ひたいと言ふんだね。』

『でも、苦しんでいらつしやるのは、あの方でございますわ。』

それから湯に入つて、朝とも晝ともつかず飯を食ふと、それがもう十一時過ぎであつた。で、愚圖々々してゐるうちに、晝過になつて、周造は急に熱海にゐる友人のことを想出して、自動車を傭つたが、小田原まで矣子と同乘することにした。

『ではお願ひしたことは、屹度でございますね。』 矣子は小田原で別の自動車に乘つて別れる時念を推した。

『あ、可いとも。郵便で送るか、己が持つて行くか、孰にしても安心していゝよ。』

矣子の自動車が、國府津の停車場へ着いたのは、もう二時頃であつた。彼女は。周造に別れて獨で歸ることが、何となく物足りなく思へて、途々暗い氣持になつてゐたが、其も其時だけで、こゝ迄來ると悲哀がもう拭取られたやうに消えてゐた。

すると其時、待合室にゐる彼女の傍へ、にや〳〵した笑顏で寄つて來る男があつた。

『今お歸り。』 彼は微聲で言つて、彼女の前に突立つた。

矣子は驚いたが、それが早瀨だとわかると、忽ち嫣然した。そしてクションから跳起きて、『あら、貴方なの。今どこに在しやいまして?』と、深い目色をした。

『藤野さんの處へ——一寸言のこしたことがあつたから。』

『さう。では丁度ようございましたわ。御一緒に歸りませうね。』

『あの細君が、貴方に宜しくと言つてゐました。』

『さう。』と、矣子は答へたが、『私ほんとに嬉しいことがございますのよ。何も

かも巧く行きさうなのよ』

『何がですか。』早瀬は悦けた顔で訊いた。少しもそんな事は豫期しないといふ風であつた。

『あのお金のことよ。』

『もうそんな話をしたのですか。』

『私あの人と一緒に行つたのは其が目的だつたのでございますもの。それで私事情を話して頼んで見ましたの。』

『僕の事情をですか。そして僕や河北の細君の名前も出したですか。』

『いゝえ。』

『それで承諾したのですか。』

『は。』と、咲子は應へて、『私腕があるでせう。』

早瀬は呆れた顔をした。

『腕よりか度胸があるね。』

『お金は近いうち、屹度私の掌に入れますから、然うしたら貴方にお渡しますわ。』

『僕はそんな金を、唯無意味に受け取ることは出來ません。いかに事情が切迫してゐるにしても、名もない人から金を受取る理由もなければ權利もない。』

『だから可いぢやありませんか、貴方はあの人と直接の交渉なしに、私が貴方に御用立てすることにすれば……』

早瀬は本氣にもなれなかつた。で、押問答をするのも馬鹿々々しさうに、默つてゐたが、しかし眞實咲子が自分に感動して、金を拵へてくれるものとすれば、其の動機には稱讃すべき點もあるやうに思へた。其にしても萬といふ金の受授をするのに、恁うも平氣でゐられる彼女の態度が、不思議でもあり、薄氣味惡くもあつた。

やがて改札が初まつたところで、二人はプラットホームへ出て行つた。そして間もなく入つて來た上りの列車に乘込んだ。

クションの上で、二人は又その金のことについて、話を續けたが、早瀨はそんなに迄して、河北を救はねばならぬか否かと云ふことについて、最初思込んだ時のやうな張詰めた氣持が多少失せてゐるやうな氣がした。然し詳しく訊いてみると、唉子は確に其金を拵へるらしかつた。彼女は十二分の自信をもつてゐるらしかつた。

『では、恁うしませう。僕がその人に借りることにして正規の證書を入れませう。』

『貴方が何うしても、私から取るのが厭だと仰やるならばね。』

『夫ならば貴女の御好意を、悅んで僕も受けることが出來るのです。』

『え、それは貴方のお氣任せでございますけれど、折角私が貰ふことに話が纏まつたのに、又そんな話をするのも面倒ですから……では恁うしたら如何でせう。其のお金が來たら、私から貴方にお貸することに。そして其も形式ですけれど。私が證書を戴いておきますの。』

『それでも可いやうなものだが……』と、早瀨は決定しかねる風であつたが、今すぐ決めなければならぬ譯もないので、其話は未解決のまゝ打切つてしまつた。

東京へつくと、二人とも可成腹の減つてゐるのに氣がついた。で、何か食べて行くことにして、ぶら〳〵銀座通の方へ出て行つた。

早瀨は二度目に藤野に逢つた時河北の事情の一層切迫してゐたことを聞いたので、夫も氣にかゝつてゐたが、安心して唉子の話に惹着けられてはならないと思つた。

痰

（一）

熱海から歸つてから、周造は咳子と堅く約束した一萬圓のことを、忘れるともなく忘れてゐた。——忘れたといふよりも、實は金策の當がないので、つい〳〵放拋つておいたのであつた。

實は周造は亡つた先代の弟の子で、其の先代の弟である彼の父は、出て埼玉在の他家を繼いでゐた。そして周造は、大槻家に子がなかつたところから、幼少のをり貰はれて來たので、母といふのも他人であつた。で、彼は其の母に餘り親しみをもたなかつたが、今も生きてゐる祖母には可成愛せられてゐた。祖母は自分の財産として、一萬やそこいらの物は有つてゐた。で、彼はそのことを其となく祖母に話してみたのであつたが、そんな事は彼が是迄に度々あつたので、ちびちび絞取られて懲りてゐたうへに、近來ひどく耳が遠くなつたので、細い内密話もできかねた。埼玉の實父へ持込むことも氣づかないではなかつたが、實父の家は以前から豐かな方ではなかつた。

で、彼は咳子に怨まれるとは知りながら、思ひ惱んでゐるうちに、何うでも可いといふ氣になつてしまつたのであつた。

咳子からは二度ほど手紙が來たが、それも封を切るのが可恐しいやうな氣がして、其まゝ何處かへ棄てしまつた。彼は咳子に濟まないことは十分知つてゐたが、咳子が思つてゐるほど金の自由が利かなかつた。私印さへ母の手許に預けられて、齋藤辯護士の承諾を得なければ使用することが出來なかつた。

するうち一月弱の日が、不安のうちに過ぎた。

すると或日の午後四時頃、彼が庭の花畑へ出て、土弄りをしてゐる處へ、女中が一枚の小形の横封をもつて來た。